東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.28

目　次

【特集①】常設展示室の挑戦 …… 1
●地域科学館における常設展示室のこれまでとこれから
～教育普及活動を軸に広がる常設展示室の概念～
多摩六都科学館　近藤由美子 …… 2
●繊維博物館のリニューアル
東京農工大学工学部附属繊維博物館　田中鶴代 …… 5
●すまいづくりまちづくりの技術を伝えて
集合住宅歴史館　大木真理子 …… 7
●常設展示室 展示替えの歩み　清瀬市郷土博物館　柳澤 剛 …… 10

【特集②】多摩川の自然と文化を考える …… 12
●多摩川の環境について　府中市郷土の森博物館　中村武史 …… 12
●多摩川を描いた絵巻２題　府中市郷土の森博物館　小野一之 …… 14

会員館活動報告 …… 16
東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿 …… 28

2007.3

東京都三多摩公立博物館協議会

特集①　常設展示室の挑戦

常設展示室は、言うまでもなく博物館の「顔」です。来館者が普段もっとも接する機会が多いのは常設展示であり、特別展やワークショップなどにいくら力を入れたとしても、常設展がお粗末ではその博物館全体の印象が台無しになってしまいかねません。

最近では、開館から数十年が経ち、常設展のリニューアルを検討している館も多いようです。しかし、予算上の制約などもあり、なかなか進んでいかないのが現状です。

そこで、今回の特集では、改めて常設展示室に焦点を当て、「博物館の顔」のゆくえについて考えてみたいと思います。

常設展示室に関するアンケートの結果

特集に先立ち、ミュージアム多摩編集委員会では、会員館に常設展示室に関するアンケートをおこなってみました。その結果は以下のとおりです。（回答数26館、回収率100%）

問1　常設展示室に相当するものが設置されていますか。

□はい→22館（84.6%）

※企画展やその他事業によって常設展が一時移動・撤去されることがありますか　ある→12館　ない→10館

□いいえ→4館（15.4%）

問2　これまでに常設展示室のリニューアルを実施したことがありますか。

□全面的に→4館（15.4%）　□部分的に→10館（38.4%）

※変更箇所（複数回答）

機械・什器の導入など→5館　解説内容→9館

レイアウト→11館　その他→3館

□したことがない→11館

問3　今後、リニューアルの予定はありますか。

□今後、具体的な計画がある→4館

□構想段階である→6館　□予定はない→14館

問4　常設展示のあり方について、思うこと・考えることがあればご記入ください。

・予定はないと記入しましたが、個人的には何かしなければと考えてはいます。（檜原村郷土資料館）

・当館の常設展示は昭和56年の開館時からほとんど変わっていない。このため平成19年1～3月の間に地元の特産品であった軍道紙（和紙）、黒八丈（絹の織物）の展示を予定している。（あきる野市五日市郷土館）

・その館の「顔」となる常設展示であるから、何度訪れても新鮮味のある展示が理想だと思うが、なかなか難しい。日本サッカー協会の「日本サッカーミュージアム」もこのたびリニューアルしたように、一つの「顔」だけで長年勝負するのは難しく、リニューアルは必要なんだと言う共通意識が必要だと思う。（羽村市郷土博物館）

・当館では、企画展示はほとんどせず、常設展示だけで構成されているので、求められている回答がこれで良かったのか少し不安です。少しずつ収蔵品を増やし、展示できるようにすすめてはいますが、最近では館内も手狭になり、屋外に常設する資料が増えてきています。（集合住宅歴史館）

・常設展示も展示替をする必要を感じるため実施している（来館者のニーズに答えるため）。（福生市郷土資料室）

・リニューアルまではいかないが、町の特徴がわかる展示、来館者にわかりやすい展示など、心がけて行きたい点は多々あります。（瑞穂町郷土資料館）

・常設展示はその館の顔ともいえるものなので、館特有の目玉となる様な展示があると良いと思う。多くの来館者はいつ来ても変わりばえしない展示でつまらないと感じていると思うが、現実的には常設展示は頻繁に入れ替えできないものなので、企画展とうまく組み合わせて補充することになるのだと思う。（立川市歴史民俗資料館）

・リニューアルとは言えないが、民俗コーナーや自然コーナーでは展示資料の入れ替えなどを不定期に行っている。できるだけ多くの資料を活用したいからだが、歴史コーナーでは資料が乏しく同じようにはできないし、全体の流れを考えると大きく変えるのも難しいかも…。とはいうものの色んな情報や新しい情報をなるべく伝えたいという思いはあるのは確か。何かいい方法があればご教示ください。（東大和市立郷土博物館）

・予算はともあれ、館内部で「館の目指すもの」に対する統一見解がなければ、リニューアルは出来ない。出来ないが、統一見解を出すこと、それが難しい…。（東村山ふるさと歴史館）

・常設展示は、その地域の歴史概観展となっていることが多く、改めてリニューアルを行うにあたっても基本的な流れを変えることは難しい。特色を出すと、一度見ただけで十分だという印象を与えることにもなりかねず、常展のリニューアルは必要性を感じつつ、その具体案を出すことの困難さを感じている。（くにたち郷土文化館）

・当館における展示は、全て企画展ではありますが、あくまでも「たましんコレクション」による所蔵品を出品致します。（たましん歴史・美術館）

・常に「生きている博物館」であるために、柔軟に更新できることが重要。お金をかけなくても手軽に変更していけるシステムが必要だと思う。（パルテノン多摩歴史ミュージアム）

・その博物館の概念（コンセプト）を表す基準としてぶれの少ないものであり、そこから派生、発展した展開を加えていけるものだと思います。それは分かり易く展示され、見手の違いによっても多様な理解が可能なことが望ましいと考えます。（府中市郷土の森博物館）

・10年程度のサイクルで全面リニューアルが必要と考えるが、財政的な事情で全部は困難（今後も望み薄）。このため、1年ごとに、小規模な展示品の入れ替えや配置換えをして、展示のマンネリ化を防ごうと対処療法を試みているのが実態。（小金井市文化財センター）

・常設とはいつ行っても、資料が見れたり、情報が受けられたりするものであると思います。その意味では各地域の博物館活動の根幹となるものでしょう。いわば館の顔といったものとしたいと思っています。（江戸東京たてもの園）

・常設展示は当館では2つの展示室と展示ホールなどからなるが、別紙のとおり歴史展示室と民俗展示室で計24回展示替えを行っている。市の広報紙などを使い、PRをしているが、なかなか学校教育現場までの周知が行きとどかない面がある。これは学校側からの見学問い合わせ時に判明するのだが、他館でのPRの仕方などについて知りたいと考えている。（清瀬市郷土博物館）

・常設展示の活性化については、計画を持って段階的に可動式の展示物にするなど実施しているが、全ての展示物について実施することは難しい。（当初より移動することを前提に設置、製作された展示物ばかりでない。）三博協の会員館で社会性に伴った共通のテーマに基づく展示物を共有することで、各館の垣根を越えた連携ができたらよいと思う（巡回展示など）。（多摩六都科学館）

・常設展示は、本来そこに行けばいつでも見られるもので、地域の博物館にとって展示の基本だと思います。来館者もそれらを期待して来るので、常設展示の資料を撤去して、全館を使った特別展示を開催することがありますが、その時は郷土博物館なのに郷土の歴史の展示がないという意見が必ずあります。（調布市郷土博物館）

地域科学館における常設展示室のこれまでとこれから
～教育普及活動を軸に広がる常設展示室の概念～

多摩六都科学館展示フロアスタッフ責任者　近藤由美子

1　はじめに

多摩六都科学館は、多様な社会の変容に伴い、高まりつつある生涯学習のニーズに応えるべく、東京都多摩北部地域の小平市、東村山市、田無市、保谷市（平成13年1月21日に西東京市に合併）、清瀬市及び東久留米市の6市で、平成6年3月に開館した総合科学館である。

常設展示室、科学学習室やプラネタリウムドームでの天文普及事業があり、自然現象や日常的な科学の原理を発見、体験する場の提供を目指している。

2　運営体制

昨今の博物館・美術館等を取り巻く経営環境と同様、財政の見直し、多様なニーズに応えた事業の実施が求められる中、現在、一部事務組合と民間企業による独自の官民協同体制で、運営体制・経費・事業プログラムの見直しを図りながら、地域で求められる役割を模索し、歩んでいる。

展示フロアスタッフ含め、学習室・プラネタリウムといった教育普及スタッフは、民間の事業者という立場である。

3　多摩六都科学館基本計画と体制の変革

長期的な運営改善を図り、学識経験を有する運営協議会の委員の提言のもと、一部事務組合及び教育普及部門とで多摩六都科学館基本計画が定められた。

また、体制面でもそれまでの単年度契約から、平成16年には3年間の継続契約となり、安定した事業計画で取り組めるようになった。

4　長期的な視野における学習・体験支援

多摩六都科学館基本計画と体制変革の結果、単年度では成し得なかった、学校のニーズやリピーターの傾向を盛り込んだ展示事業の展開が可能となった。

学校という、児童の成長を長期的に把握できる場所とは異なり、一時的な学習目的で利用がされる科学館においても、数年間の利用状況を追うことで、ある程度の児童の学習傾向を把握できる。日々の運用状況や傾向を把握することは、科学館全体の事業の方向性を検討する際、データとして有効であり、利用のニーズに合わせた展開につながっている。

5　常設展示室の変遷

日々の学習・体験傾向を把握した上で、利用者の様々なニーズに応えていくために、常設展示室の固定式展示物を可動式展示物にしたことが大きく関係する。まず、5つのテーマで区切られた展示室のうち、一室を中心に展示物の可動化を行った。開館時の13年前に設置された展示物も、5年前にリニューアルされた展示物も、もとは固定式の展示物であるため、電源を床からとっている。可動式にするにはコンセント配線型にし、壁面や柱にある電源をとるようにした。また、展示物の足にキャスターを付ける改造も合わせて行い、展示物製作業者が来館せずとも、展示フロアスタッフが短期間の企画展示に合わせて展示物を移動させ、スペースを作ることが可能になった。

3年前から、専門家と当館職員で取り組んでいる化石事業では、多摩地区で採掘した化石を中心に展示するスペース展開も実現された。このように、可動式展示物のメリットは、配置換えをした展示物により展示室に新鮮な印象を与え、リピーターにとって新しい学習・体験ができることである。加えて、年度途中に入った事業や拡大された事業が入った際、展示物を端に寄せて移動し、柔軟にイベント展開を行える点である。移動によって、展示物自体の機能を失うことなく利用してもらえる。展示事業の他に、ボランティアやNPO法人の活躍も広がり、全ての事業を展開するとなると、館内全体に場所不足が生じる。利用者に参加の選択肢を増やし、充実した滞在時間を提供する上で、このような展示室のスペースを活用しながら場所不足を補い、同時に館内における全事業のコーディネート機能が不可欠である。この機能を担う手法やポジションの未整備が課題である。

6　常設展示室における教育普及活動

①展示レクチャー（サイエンスBOX）

各展示物の体験だけでは分かりにくい自然現象や科学的原理を、身近なアイテムを使い、理解を補っている。さらに展示物の体験に関連した科学実験を、簡単なアイテムにより、短時間で体験してもらうことで、利用者に身の回りの事象と照らし合わせた興味付けをする。

例えば、国際宇宙ステーションに建設される日本のモジュール「きぼう」のエアロックを再現した展示物では、スタート前に開閉

燃料電池展示レクチャー

していた扉が、ボタンを押して演出をスタートすると真空になり開かなくなることを体感できるが、興味を持たない子どもに展示物の趣旨を伝えるには難しい。そこで、ポンプ付き漬物容器の中にイラスト付きの萎んだビニール袋を入れて、ポンプで真空にすると、ビニール袋が膨れてイラストが現れる様子を目で確認したり、タオルがけの吸盤フックを爪で引き剥がす際の体験を通じて、空気の押す力の意識付けを行ったりしている。こうして、目に見えない空気の力を目に見えるかたちで紹介し、いくつかの事例を体感することにより、初めて納得した表情を見せてくれて、体験後は同じ展示物で積極的に繰り返し展示物を体験したり、まだ体験をしていない同行の家族や友人に自分の体験をもとに原理を説明しようとする子どもたちの姿を多く見受けられる。原理を理解している大人でも、実体験をする中で、子どもたちと同じように未体験の同行者への投げかけをする姿を見受けられる。このように利用者同士のコミュニケーションを促進する場を仕掛けることも、展示フロアスタッフの大切な役割のひとつである。

さらに、常設展示室は科学館の中で利用頻度が一番高い場所であるだけに、学習室やプラネタリウムといった目的を持った上で利用する場所に比べ、数多くの利用者にコミュニケーションを図る機会が多いことから、科学館利用者の興味付けの第一ステップとなると考えている。開館から13年を経た現在でも、初めて来館する利用者も多い。施設の構造上仕方のないことであるが、科学館に対して明確な利用目的を持たずに来館した利用者にとって、サイエンスショーや実験教室等の限られた空間・時間で実施されるイベントや教室の存在を知ることは難しく、あらかじめ科学に興味を持って来館するリピーターの利用状況とは異なる。

展示室で1つでも何か心に残る体験・時間を過ごしてもらうことが、科学や身の回りの自然現象や実体験への興味・関心を引き出すことにつながると思い描きながら、現在、展示レクチャー（サイエンスBOX）でシンプルな科学工作も盛り込んだ体験を検討している。さらに体験や知識を深めたい利用者には、関連の館内イベントを積極的にPRすることにより、展示室から、学習室、プラネタリウムや講演会利用への足がかりとなることを期待し、展示室利用者から他のプログラムの参加者へとつなげていきたい。

②サイエンスショー

先に述べた施設の構造上の課題から、展示室利用者を別の場所で開催されるサイエンスショーの利用へ導くことも課題であった。サイエンスショー会場を展示室の空きスペースに移動する試みもした。しかし、じっくり掘り下げて伝える目的のあるサイエンスショーは、開放的な空間の展示室において、見学スタイルがマッチしなかった。そのため、展示室での実験・体験は、簡単・短時間でコミュニケーションを図ることを目的とした展示レクチャー（サイエンスBOX）にその場と役割を譲り、サイエンスショーは、さらに体験を深めたい利用者に対して、ステップアップの場としたい。展示室とつながりを持たせる手法としては、サイエンスショー開催日の展示レクチャー(サイエンスBOX）には、サイエンスショーと関連したアイテムを紹介するなどして、利用者が興味を持ちやすい工夫を施していきたい。

オーロラ写真展（展示ローテーション）

③展示ローテーション

展示レクチャー（サイエンスBOX）の他に、展示室を活性化する取り組みの一つとして実施した展示ローテーションも、展示物以外の情報伝達や体験を広げる一つのツールである。

ある一定期間ごとの企画展示の中で、特定の展示物をピックアップし、パネル展や展示アイテムを加えて紹介することで、普段注目されにくいケース内展示などにも注目が集まった。また、官公庁・企業との共催による防災展や写真展などで様々な興味付けを図ることができた。このように、展示レクチャー（サイエンスBOX）と展示ローテーションは目的が異なるが、長期的にそれぞれの事業を実施する中で、展開を大きく広げ、新構築される可能性を秘めている。

④企画展

多摩六都科学館基本計画の提言のもとにスタートした特別企画展における当館独自企画の推進でも、展示室の活性化を意識している。それまでの外部委託の企画展に比べ、地域に根ざしたテーマで当館の利用者層に合わせた内容として、常設展示室の活性化の可能性を広げる試みである。

春期や夏期の繁忙期に企画展実施スペースは混雑する。常設展示室の空きスペースに、企画展の体験コーナーを設け、利用者は企画展を拠点に常設展示室へも分散し、会場の混雑を緩和するとともに、常設展示へも目を向けてもらう試みである。企画展のテーマが目的で来館した利用者や、初めて利用する来館者には、企画展利用のみで見学を終える場合も見受けられる。今後も施設側の人間として、展示レクチャー（サイエンスBOX）で挙げたとおり、常設展示室、学習室やプラネタリウム等への足がかりとして、企画展のテーマが合えば、関連展示物の紹介や展示レクチャー（サイエンスBOX）での体験も同時に仕掛け、企画展から施設全体の活用を促していきたい。

⑤ワークシート

東京学芸大学の提言を受けながら、展示室の見学に訪れる学校団体向けに展示学習シートを作成した。穴埋め式や自由記入式など、いくつかのバリエーションの中で、使用する学校団体の状態や傾向を日々追うことで、必要とされるシートのタイプを把握することができる。また、利用頻度が高いシートのタイプから、現在の児童の学習傾向を推測することができ、児童の学習段階

に応じた支援が行える。

作成から2年目を迎えた現在、学校団体以外に、保護者が主催のグループ利用時にもワークシートが活用されており、広がりをみせている。システムが適えば、今後はインターネットで公開し、利用者の事前・事後・自由学習に提供していきたい。

⑥展示物解説書

各展示物のサイン類や体験だけでは得られない情報を、団体利用の事前・事後学習に役立ててもらうことを想定し、東京学芸大学の協力の下に、作成している。解説書を利用者のニーズに合わせた形で展開するために、今後ワークシート同様、利用傾向を追う必要がある。

7　科学館の役割と地域・学校教育とのつながり

計画事業とは別に、設置者や利用者からは、年々異なるニーズや状況が寄せられる。そのような状況を反映するために、実績だけではなく、満足度や科学への興味付けが図られているかといった成果を重視し、各取り組みに対し事前・事後に、職員一同が自己評価するシートを記入している。そのシートをもとに、学識経験者の委員の助言を受け、この3年間、事業全体のあるべき形を模索し続けている。展示事業も同様で、どの取り組みをとってみても、展示室の使い方が重要な鍵となってくる。展示室の在り方の概念を広げたこの3年間を土台に、様々な地域のニーズがつながり始め、地域の活動の拠点として果たす科学館の役割が、利用者や市民に浸透し始めている。展示物の可動化、展示ローテーションや展示レクチャー（サイエンスBOX）を通じ、中学生を中心とした職場体験、防災・環境問題をテーマにした官公庁・企業・大学の取り組みの事例紹介や、市民写真家による展示写真の寄贈など広がりをみせている。現在、出前サイエンスショーで学校訪問することはあるが、今後、これまでの常設展示室と地域のつながりを基に、館内の様々な展示事業を地域へ展開していくことを、これからの常設展示室の概念への挑戦としたい。

繊維博物館のリニューアル

東京農工大学工学部附属繊維博物館助教授　田中鶴代

2000年（平成12年）7月1日に、私は繊維博物館の専任助教授として採用された。東京農工大学工学部に繊維博物館があることは知っていたが、長く東京を離れていたこともあり一度も見学に訪れたことはなかった。着任してまず驚いたのは雑然としていてほこりだらけの展示であった。以前見学したことのある人から「お化け屋敷のようなところ」と聞かされていたが、正にその通り。ほこりで内部が見えないほどのガラスケースを拭くことが初仕事になった。しばらくすると、繊維博物館がこのようになった理由が分かってきた。

繊維博物館の歴史は1886年（明治19年）、農商務省（現在の農水省と経済産業省の前身）の蚕業試験場に設置された「参考品陳列場」に始まる（当時は現在の北区にあった）。繊維博物館は東京農工大学工学部が作った博物館であるようにみえるが実は反対で、博物館が先にあり、東京農工大学工学部の方が後からできたのである。所蔵品は工学部の前身、東京高等蚕糸学校当時からの養蚕・製糸関係の資料多数のほか、繊維の素材と繊維関係の道具・機械を主としている。

生糸が最も重要な輸出品であった明治時代は言うまでもなく、1970年代初め頃までの工学部においては、社会に役立つ技術者の養成という目的から繊維関係の教育が大きな部分を占め、繊維博物館は学生の講義や実習に大いに活用されていた。しかし産業界の需要が減少するに従い、繊維に関する教育は既にその目的をほとんど終了していることになった。繊維博物館は工学部のなかで最も「役に立たない」部署とみなされるに至り、その流れは現在も変わっていない。そのため予算や人手の不足から冒頭に書いたような状態に到ったのである。

しかし折角の多数の貴重な資料が教育や社会貢献に生かされないのは非常に残念なことである。博物館の基礎はまず常設展示の充実にある。そのためには大幅な展示替えが必要なので、以下に述べるように3期に分けてリニューアルを実施した。リニューアルする前に行ったことは、雑然と展示されていたり、廊下に放置されていた大量の不要品の片付け・廃棄であった。

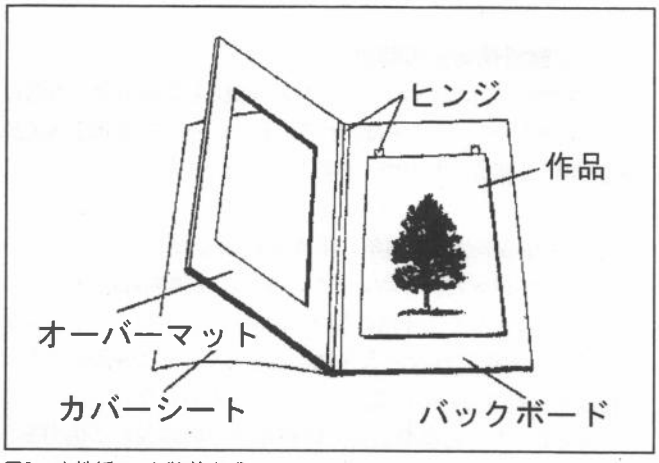


図1　中性紙マット装着方式

1　浮世絵展示のリニューアル

繊維博物館では養蚕・製糸・機織をテーマとする江戸時代から明治初期の浮世絵を多数所蔵しており、蒐集した鈴木三郎東京農工大名誉教授の命名によって「蚕織錦絵」と呼ばれている。鈴木教授より寄贈された蚕織錦絵は当初は特別展の際などにのみ一般公開されていた。1993年（平成5年）に浮世絵展示室がオープンし、常設展示がされるようになったが、美術品の展示についての専門家がいなかったため、展示環境が良いとはいえない状態にあった。

2001年（平成13年）より文化財保存科学専門の学芸員によって、中性紙マット装着方式（図1）が採用され、従来のガラス板圧着方式の額（図2-1）から紫外線防止アクリル板の新しい額（図2-2）に替えられた。蚕織錦絵の中性紙マット装化は現在も継続して行われ、データベース化とともに特別展や展示替えに活用している。展示室では来館者が入室した時のみ自動的に点灯するシステムを採用しているが、その際の照度も従来より減じ、年間積算照度50,000ルクス時の制限に努めている。新額装の浮世絵展示は前年のノーベル化学賞受賞者白川英樹博士に真っ先に見学していただくことができた（図3）。

図2-1　旧額装（ガラス板圧着方式）

図2-2　新額装（中性紙マット装方式）

図3　白川英樹博士の見学

2　常設展示室のリニューアル

(1) リニューアルの方針と準備

2002年（平成14年）4月に、特別展終了後の1週間を臨時休館として、博物館2階と3階の5つの展示室の展示替えを大々的に行った。リニューアルの方針は繊維博物館の特長である繊維素材と道具・機械類の展示を主とすることにある。基本となる方針は次のように決定した。

繊維素材別の展示を基本とし、その素材に関連する道具・機械類も統一的に展示する。ただし大型繊維機械類（自動繰糸機や紡績機など）の移動は行わない。

実施の1年以上前から、展示室内の現状調査を行い、室内の見取り図を作成した。以下のような方針に基づいて、資料を展示するものとしないものに分類したり、収蔵庫を調査して新たに

展示する資料を選出した。

①歴史的資料（明治初期の生糸や世界最初の化学繊維など）が片隅に置かれていたので、目立つところに展示する。

②繊維に直接関係あるものを優先する。従来展示されていた紙・プラスチック類の展示は減らす。

③褪色しやすい繊維製品類（着物など）の展示は最小限にとどめる。

④大正時代から使われている展示ケースなどはそれ自体が貴重なので、できるだけ活用する（図4）。

図4 片隅に置かれていた大正時代以来の展示ケース中に世界最初の化学繊維（左奥）

(2) 展示方式について

リニューアルの実施に当たっては展示室のレイアウト・展示方法について次を原則とした。

①展示室にのみ展示し、廊下部分には展示しない。

②車椅子が通れる通路を確保する。

③資料は原則的にガラスケース内に展示する。ガラスケース内に展示不可能なもの（道具類など）のみ台上に展示する。

④天井から案内板やキャプションを吊るす方式を止める。

⑤新しい展示用品類の購入は行わず、従来ある展示用品を活用する。

これらはほとんどが博物館関係者には常識的なことばかりであるが、それまでの展示が図5のように、①廊下にも展示品が置かれ、②車椅子では通行できず、③資料がガラスケースの上や床に直接置かれ、④頭上に落下する危険があり、さらに⑤予算がわずかである、ためであった。もっと現実的な意図としては掃除をしやすくすることにあった。

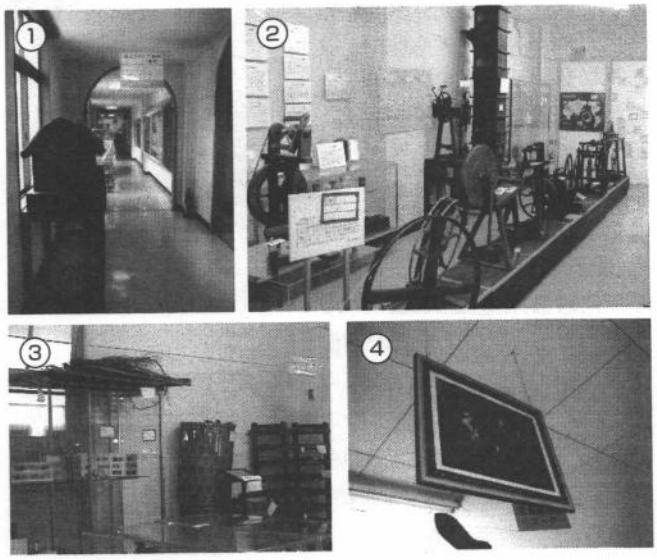


図5 リニューアル以前の展示の例

(3) 展示計画の作成とリニューアルの実施

以上に述べた方針に基づき、各展示室の展示品を決定した。従来の展示と変更したのは次の点である。

・これまで分散して展示されていた繊維博物館の展示の中心となる蚕糸（絹）関係の展示を同じフロア（博物館2階）にまとめる。

・絹以外の繊維と手工芸的な道具類は絹とは別のフロア（博物館3階）に展示する。

展示替えは引越し業者に依頼したが、同じ階での展示品の移動のほか、2階から3階への移動およびその逆、収蔵庫への移動、別館（博物館本館より約260m離れている）への移動が混在しているので、すべての展示品に色分けしたシール（引越しに使われているもの）を貼り分類した。大きなものの移動としては「羊の剥製（巨大なガラスケース入り）」があった（図6）。これはそれまで2階に置かれていたが、2階を蚕糸（絹）関係の展示にするためには、どうしても3階に移動しなければならず、エレベーターにも乗らないため、かなり大変な作業であった。

図6 羊の剥製

これ以外にも十数人がかりで移動したものなど、予想以上に大掛かりな作業となったが、大筋では計画通りの展示にすることができた。壁の塗り替えなど日数のかかる作業は行わず、展示替えのみであったので、1週間の臨時休館ですんだのである。

(4) リニューアル後の展示室

展示替え後は(1)～(3)に述べた条件はほぼ達成され、みちがえるようにすっきりした展示となった。例として蚕糸関係の展示でまとめた2階の展示室の例を示す（図7・8）。

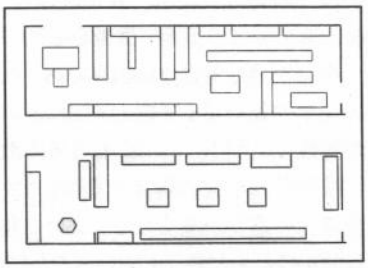


図7 展示替え以前（上）と以後（下）の展示品の配置。▭は蚕糸（絹）関係。縮尺は正確ではない。

大型機械類の移動は行わなかったため、織機が何ヵ所にも分散されて展示されているなどの不満も残るが、以前よりも見学者の案内もしやすくなり、浮世絵展示室も同じフロアにあることから、2階のみの見学でも十分見ごたえがあるように改善できた。

図8 展示替え後の蚕糸関係の展示室

3 化学繊維情報室の開設

これも常設展示室のリニューアルの一環として2005年（平成17年）に実施した。くわしくは、すでに『ミュージアム多摩』No.27（2006年）に紹介したので、参照していただきたい。

以上、2000年から2005年に繊維博物館でおこなったリニューアルについて述べた。リニューアルといっても博物館関係者には当然のことばかりで、今回の特集にはふさわしくないかもしれない。国立大学独立行政法人化後、きびしくなった情勢のなかで博物館を維持するためには、地域の支援以外にないと思い、この一文を記した。三多摩公立博物館協議会の諸館のご協力を心からお願い申し上げます。

すまいづくりまちづくりの技術を伝えて

集合住宅歴史館施設案内担当　大木真理子

特集テーマが「常設展示室の挑戦」ということで、「常設展示室」しか持たない当館に白羽の矢が立ち、少し戸惑いも感じますが、当館の成り立ちや展示方法を含め、「集合住宅歴史館」をご紹介します。

まず、集合住宅歴史館の位置づけからご紹介しましょう。集合住宅歴史館は、UR都市機構都市住宅技術研究所における一般公開施設の一つです。UR都市機構はすまいづくり、まちづくりを主な事業としている組織ですが、もともとは昭和30年に設立した日本住宅公団がその前身にあたります。「公団住宅」、「団地」と言ったほうが馴染み深いかもしれません。

1　はじめは名前もなく

集合住宅歴史館は、現在4つの移築復元住戸と住宅設備の変遷などを中心に展示しています。もともとは他の実験棟であった建物のフレームだけを残し、団地の住戸をはめ込むように移築復元したもので、まだ「集合住宅歴史館」という名称も付いていませんでした。元の実験棟が実験施設としての役目を終えていたちょうどその頃、UR都市機構（当時：住都公団）では昭和30年代の団地の建替事業がすすめられており、その中から昭和30年代初期の設計による東京都板橋区にあった蓮根団地の一部を移築し、一般の方もご見学いただけるようにしました。それが平成7年のことです。

研究所では、今後のまちとすまいづくりを考えていく上で、これまでに蓄積されてきた集合住宅建設技術を伝承し、次の世代へ引き継いでいくことも研究所の課題であると位置づけ、歴史的集合住宅の保存・活用に関する研究として、これまでの調査・研究と平行して主要な住戸の調査及び部品の収集を始めました。そして、平成8～9年にかけて同潤会代官山アパート、晴海高層アパート、住宅設備などの移築をすすめ、平成9年に「集合住宅歴史館」として集合住宅の変遷をご紹介する施設として整備しました。

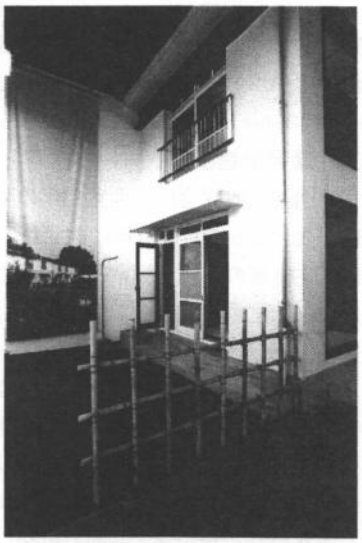
この歴史館が整備される背景には、各時代で一般に普及した建築部品や構法は、その時代のスタンダードであるがゆえに「あたり前のもの」として開発と変遷の記録が残されにくい状況がありました。しかし、ごく普通の部品・構法の変遷を構法計画の立場から明らかにし、将来にわたって有用な形で記録を残しておくことも、文化的価値は高いと考えられます。それぞれの部品単位での変遷は、それぞれの企業で社史編纂事業として行われてきていますが、すまいやまちづくりについての全体像を明らかにし、体系的に整理するのはなかなか難しいものです。研究所では、住宅建設を進めてきた役割を踏まえ、変遷を体系的に整理する取組みをすすめています。

2　集合住宅歴史館の展示

先にも述べましたように、集合住宅歴史館は基本として企画展示室を持っていません。収蔵資料が増えるごとに、またイベントなどを行う際に、施設内のリニューアルを行っています。収蔵資料が増える、すなわちどこかで残念ながら解体された建物や、使用されなくなった部材が出てきて資料としていただいてくるという、すこしせつない背景があります。そのため、集合住宅歴史館も一度に展示室が完成されたのではなく、特徴のある建物が解体されるにあわせて、少しずつ展示室を広げてきました。

しかしながら、展示室として使用できる場所もやはり限りがあり、平成15年に移築が行われた多摩平団地テラスハウスでは、2階建ての住戸を配置するために、収蔵庫として利用していた上下2室の間の床スラブを抜き、吹抜けをつくり展示スペースを確保しました。

このように、徐々に展示室を広げてきた集合住宅歴史館ですが、多摩平団地を移築することによって、住戸に関しては現在、建替により姿を消しつつある戦前の集合住宅の草分けから、昭和30年代の郊外型低層住宅、中層住宅、市街地系高層住宅と体系的にご覧いただけるようになりました。


多摩平団地テラスハウス

現在では、館内の展示スペースが手狭になったこともあり、屋外に展示スペースが広がっています。団地に設置されていたベンチや住棟案内板、さらに新しい資料としては、同潤会青山アパートの外灯台座があります。

昨年青山の「表参道ヒルズ」に建替の行われた青山アパートですが、ここに設置されていた外灯の台座部分を展示しています。残念ながら外灯部分は現存していませんでしたが、台座部分の仕上げが外壁と同じであったため、住棟外壁の風化具合をみる良い資料にもなっています。

青山アパート　外灯台座

そして、集合住宅歴史館のもう一つの特徴は、展示施設の見学方法にあります。案内担当者が説明しながらご案内するとい

うものです。研究所での施設の一般公開は歴史館だけでなく、全部で6つの施設をご覧いただくことが可能です。研究施設内ということもあり、2.6haほどある敷地内の施設を巡りますのでご見学の方には引率者をつけています。また、案内担当者が私も含め2名いますが、対応できる人数も限られていますので、予約制としています。そのため、一般の博物館と異なり、いつでも好きなときに自由にご覧いただくということができません。

しかしながら、ご予約いただければ、1名様から対応しておりますので、時にはマンツーマンでご案内することもあります。また、事前にどのような方がどのような目的で、どの部分を重点的にご覧になりたいのかを把握することができますので、その方々にあったご案内をすることができ、またそのように心がけています。

それでもやはり、団体の方は時間の都合などあるため、ある程度制約がかかってしまいます。見学後に行っているアンケートを拝見すると、「もっとじっくり時間をかけてみたい」というご意見もあり、その対応の一つとして、年に一度「特別公開」という自由にご見学いただけるイベントを設けています（こちらについては、活動報告欄をご覧下さい）。

3　移築はどうやって？

ご来場の皆様から「どうやって移築したのですか?」という質問をたびたびいただきます。様々な部屋が一つの建物に埋め込まれていますので、不思議と思われるようです。それでは、どのように移築が行われたのか、その一部をご紹介します。

①同潤会代官山アパートの移築

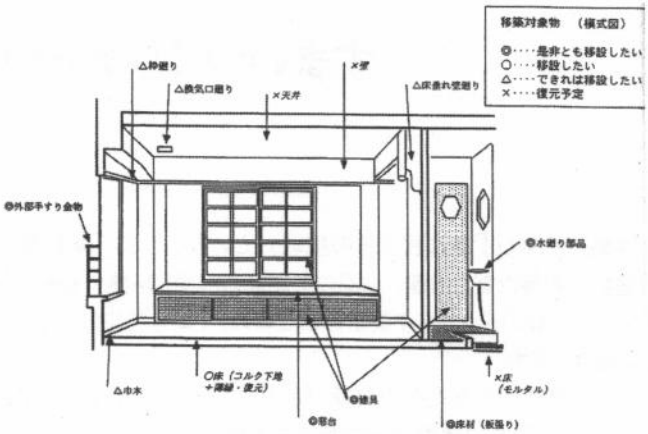
財団法人同潤会は、大正12年の関東大震災の際、寄せられた義捐金によって大正13年に設立され、住宅の建設・運営を中心に住宅復興の一役を担いました。建設された住宅（約12,000戸）のうち、耐震耐火のアパートメントとして、RC（鉄筋コンクリート）造アパートが東京、横浜に16ヶ所（約2,800戸）建設されました。

RC造集合住宅の普及する起点となる事業でしたので、同潤会代官山アパートが再開発事業により解体されるにあたり、当時の住都公団では、「歴史的集合住宅の保存・活用に関する研究員会」を、以前から自主的に調査されていた大学の研究グループや建築構法の研究者と共同で組織し、その歴史的価値を記録し、復元するための技術的検討をすすめました。

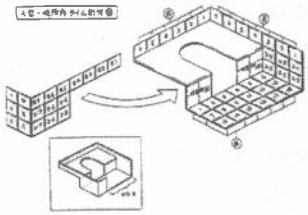
代官山アパートは、昭和2年に第一期工事部分が竣工し、昭和5年の第四期竣工までに単身（独身）住戸、世帯住戸の全337戸建設されました。店舗や食堂、娯楽室、さらには共同浴場などの共用施設が充実したアパートでした。このうち、集合住宅歴史館には単身住戸と世帯住戸を移築復元しています。

②移築部分の選択

移築部分の選択は、調査可能な住居125戸について行われました。竣工から70年ほど経っている建物でしたが、調査によりそれぞれオリジナルに近い保存状態の良い部屋が見つかりました。それらの住戸の実測図面を作成し、部材のリストをつくり、これと現物とを照合しながらラベルを打つ作業が行われました。その際に、状態の悪いもの、改造が行われているものについては、同型の他の部屋からオリジナルを探し出し補充を行うこととしました。



取外し部材の方針模式図



作図：鹿島内装センター

便所内タイル割付図と取外したタイル
トイレ部分のタイルも一枚一枚番号をふります

③取り外し工事

実際の取外し工事は、大工を中心とした施工業者があたります。通常の建築解体工事とは異なり、部材の採取が目的となるので、部材の取外しは周辺の壁面等をはつり（削り取り）ながら行い、慎重な判断が必要となりました。こまめに担当者が立会い指示を出しながら、取り合い上どちらかの部品が破損した場合は他の住戸で補充を行いました。

保存のための取り外し工事は、1住戸の取外し作業に1週間ほどかかり、前後の段取りや搬出も含めると約1ヶ月要することとなりました。

④復元工事

次に、復元展示の方針を検討していきます。集合住宅歴史館の同潤会代官山アパートの展示主旨を「日本の集合住宅の草分け、戦前の集合住宅の姿」としており、できるだけ取外した部材を生かした復元を行うという方向での検討の結果、「建築後数年が経過した住みこなされた姿（昭和初期）」を再現することとなりました。そのため、部材の大幅なクリーニングは行わず、補充部品との若干の調整により全体の調子を整えることとしました。外壁については、今日の風化した姿が強い印象をもたらしていることから、一部で解体直前の風化した状態を再現しています。

4　集合住宅歴史館をご覧いただいて

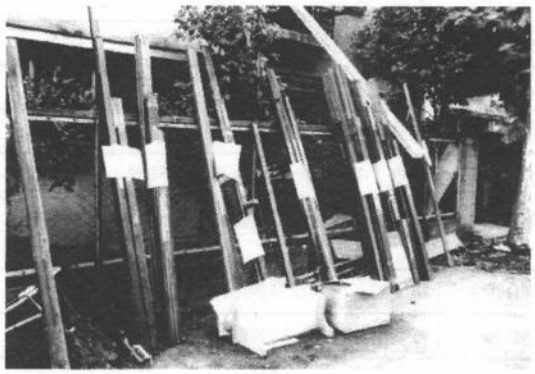
このように、当時の部材を使用し展示を行っている歴史館ですが、ご来場の多くは、やはり建築・住宅を専門に扱われている方々です。最近では“昭和の時代”に焦点があてられていることもあり、その時代を振り返ることができるとご来場になる方も沢山いらっしゃいます。もともとその住宅にお住まいだった方や実際の建設に携わった方、様々な当時のお話をお聞きすること

ができ、貴重な情報をいただくこともあります。

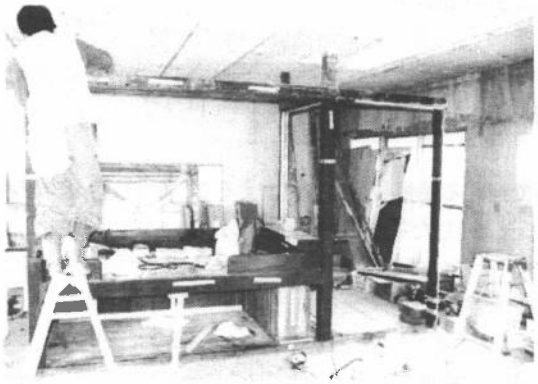
ご来場のお客様から、ご見学が終わった際によくこのようなお言葉をいただきます。「このころの時代には“タマシイ”みたいなものがあるよね」や「“何か”があるんだよね」と。同潤会アパートであれば、当時の職人さんがそれぞれ競うように作りこんだ階段の手すりや、建具の造作に。公団住宅であれば、大量供給が課せられた時代、安価な材料でもなんとか住宅不足を解消し、そして新しい住宅スタイルを確立していこうとしたその意気込みに。これらの住戸に入れば、何かしら感じるのではないかと思います。日本は社会背景が大きく変化し、豊かになりでもどこか“何か”足りないなと多くの人が感じるような時代となっているような気がします。住宅に関しても技術は進歩しましたが、やはり“何か”が足りないのかもしれません。

とはいえ、私は歴史館を見ていただいた方に“昔は良かった”だけで終わらないで欲しいと考え、ご案内をしています。何でこの場所に移築をしなければならなかったのか。環境や社会的背景は違いますが、ヨーロッパであれだけ住宅を長く住み続けていく力があるのに、どうして日本ではできなかったのか。ご覧いただいて懐かしんだり楽しんだり、それがまず一番だと思いますがそんなことも少しでも考えていただけると、ご案内をさせていただいている私としてはうれしい限りです。

移築住戸が復元されるまで

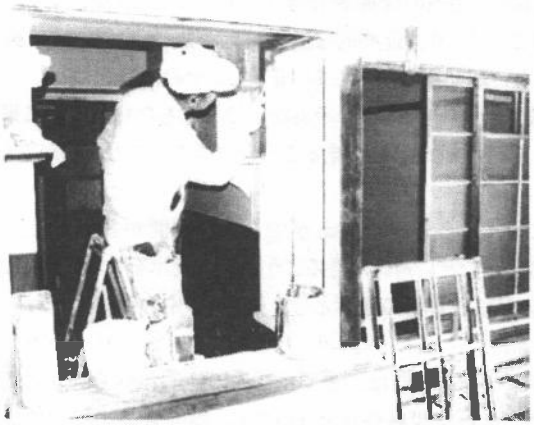


部材が取り外され、それぞれラベルがつけられます。

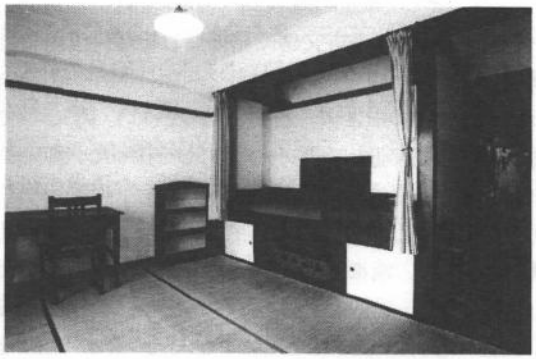


復元する場所に柱や鴨居、敷居などの主要な部材を組み立てます。骨格となる部材が組みあがったら復元するレベルにあわせ高さを調整します。

骨格となる木部にあわせて壁の下地を組みます。チリなども部材の痕跡を手がかりにします。
下地と平行して建具などの部品をはめ込んでいきます。



建具に全体のバランスを考えガラスをいれ、クリーニングをし、壁面の仕上げを行います。



完成！

参考：「同潤会代官山アパートの建築技術に関する報告書」
住宅・都市整備公団、㈱都市整備プランニング

常設展示室 展示替えの歩み

清瀬市郷土博物館学芸員 柳澤 剛

1 はじめに

当館は昭和60年11月に開館しました。開館以来20年以上が経過していますが、常設展示室はその間にニーズや調査・研究等に合わせて展示替えを行ってきました。常設展示エリアは大きく分けて、歴史展示室、民俗展示室などの展示室と展示ホール、インフォメーションセンターなどから成っていますが、本稿では、歴史展示室と民俗展示室の展示替えの歩みについて記したいと思います。

2 歴史展示室

歴史展示室は、清瀬の歴史に関して展示し、展示物や解説を通してより深い郷土への理解を育むことを目的にしています。展示室の広さは124㎡です。

開館時に「今よみがえる清瀬8000年の歴史」という内容の展示を行いましたが、これは俗にいう通史展示です。この展示を通して清瀬のこれまでの歴史を知っていただこうとするものでした。

次節で述べる民俗展示室にも言えることですが、地域の博物館として、どうしたら入館者に飽きられないかということを検討しました。それには「動き」が必要であるという結論に達し、定期的に展示替えを行うことにしました。

しかし、展示スペースも限られていることから、歴史を大きく「原始」「古代」「中世・近世」などの3つに分けて、それらをテーマにした展示を順番にしていくことにしました。いわゆるテーマ展示です。

概ね1年ごとに展示替えを行ってきましたが、平成9年度の展示替え後に、市内の発掘調査等が増加して忙しくなってきました。

このことにより、定期的な展示替えが難しくなり、数年展示替えをしない期間が続いてしまいました。その間の問題として、テーマ展示だと学校のカリキュラムなどで子どもたちが見学に来たときに、他の時代のものを見ることができないことなどがありました。

そこで、たとえ展示替えができない期間が続いたとしても、学校の見学などに対応できるように通史展示をすることにし、平成17年4月に12番目の展示として「歴史の中の清瀬」をオープンさせました。

展示替えを行う時は、まずはじめに5ヶ月間くらいかけて、資料整理を含む解説書作りを行います。物的資料の展示で途切れてしまうところを補うという意味でも重要な作業で、これにより基礎的データを整理します。その中から展示資料を選定し、模型資料の作成などを行いますが、これには2ヶ月間を要します。そしてオープンとなるわけです。

展示室の広さは限られているので、どの展示においても解説書には力を入れており、各テーマ別のものを作成しています。テーマ展示の二循目以降も最初に作った解説書を見直して増補したり、目的別に作り直したりしました(子供向け、一般向けなど)。

また、昭和62年度に実施した「土鈴づくり教室」は大変好評で、その参加者の中から有志サークルが結成され、その方々が展示の準備や模型作りなどを手伝ってくれるようになりました。そして、展示が完成した時には、自ずと展示の解説ができるようになっており、来場者に解説をする人がでるほどでした。

[表1] 歴史展示室の展示内容

昭和60年11月～	今よみがえる清瀬8000年の歴史
昭和61年11月～	清瀬で使われた庶民の焼物
昭和62年11月～	下宿内山遺跡―発掘調査でわかること―
昭和63年11月～	名主を通して知る江戸時代の清瀬
平成元年11月～	縄文時代の生活を探る
平成2年11月～	開墾、そして戦乱の時代へ―清瀬の古代・中世―
平成4年11月～	戦乱の終焉から幕政下の村々―清瀬の中世末・近世―
平成5年11月～	縄文時代の生活を探る(Ⅱ)
平成7年11月～	野塩外山遺跡 その縄文的意識
平成8年11月～	近代史のなかの清瀬
平成9年11月～	江戸時代の清瀬
平成17年4月～	歴史の中の清瀬

なお、これまで行った展示は[表1]のとおりです。開館時の展示は各時代の資料を一堂に紹介したもので、江戸時代以降清瀬で使われた焼物を展示し、商品流通によって様々な地域と関係を持っていたことを示した展示が「清瀬で使われた庶民の焼物」です。「下宿内山遺跡―発掘調査でわかること―」では、発掘調査でどのようなことが分かってくるのかを清瀬市下宿内山遺跡の調査成果から説明し、「名主を通して知る江戸時代の清瀬」では、名主の書き残した記録を通して江戸時代の村の様子を解説しました。生活用具の技術を通し縄文時代のくらしを探った「縄文時代の生活を探る」、発掘調査の成果を基に記録としては残されていない清瀬の古代・中世史を探り地域史から中央史をみた「開墾、そして戦乱の時代へ―清瀬の古代・中世―」、中世末から近世にかけての古文書や発掘資料を基に清瀬の歴史を展示解説し地域史と中央史の関わりをみた「戦乱の終焉から幕政下の村々―清瀬の中世末・近世―」。続いて、縄文時代の生活用具の製作技術を通して縄文人のくらしを探った「縄文時代の生活を探る(Ⅱ)」、平成6年に発掘調査を行った清瀬市野塩外山遺跡から発掘された遺構・遺物を展示解説した「野塩外山遺跡その縄文的意識」、清瀬の近代史上に残された断片的な資料を行政・教育・戦争・風俗というテーマでつなぎとめ、歴史的な流れとして個々の資料を展示解説した「近代史のなかの清瀬」。そして、「江戸時代の清瀬」では、江戸時代の清瀬の村々を「法と税」、「信仰と旅」、「教育」、「飢饉」、「水車稼ぎ」、「名主の家」

などのテーマに沿って解説しました。現在の展示「歴史の中の清瀬」では、地質時代から近代までの清瀬の歴史を通史的に展示解説しています。このような順番で展示替えを行ってきました。

3　民俗展示室

民俗展示室は、先人が築いた文化遺産を民俗資料を通して伝承し後世に伝えることを目的とする常設展示室です。展示室の広さは歴史展示室と同じ124㎡です。

開館時に「麦からうどんへ―清瀬の食文化―」という内容の展示を行いました。民俗展示室は開館時からテーマ展示とし、歴史展示室同様定期的に展示替えを行ってきました。これは、展示スペースを有効に活用して清瀬の生活文化をより深く理解していただくためです。

民俗展示室では、展示対象が民具中心なので展示方法などに制限があり、物の説明的展示にどうしてもなってしまいがちです。そこで、それを補完するために、伝承スタジオで年中行事や衣・食・住に関する体験事業等を展開してきました。これらを展示と連係させることで清瀬の民俗を知っていただこうとしたのです。

［表2］民俗展示室の展示内容

昭和60年11月～	麦からうどんへ―清瀬の食文化―
昭和61年8月～	絹を生みだす―清瀬の養蚕―
昭和63年2月～	生活用具―昼のくらし・夜のくらし―
平成元年2月～	生活用具―夏のくらし・冬のくらし―
平成2年2月～	人の一生
平成3年2月～	清瀬に生きる講の世界
平成4年2月～	女のくらし
平成5年2月～	子ども歳時記
平成6年2月～	清瀬の職人さん
平成7年2月～	紙・竹・藁の民具
平成8年2月～	くらしの中の文様
平成9年2月～	木の民具
平成16年3月～	農家の春夏秋冬
平成18年3月～	養蚕と織物

［表2］に示したように、これまで様々な角度から展示テーマを絞り、展示替えを行ってきました。

「絹を生みだす―清瀬の養蚕―」では、昭和の初期まで行われていた養蚕に焦点をあてた展示を、「生活用具―昼のくらし・夜のくらし―」では、昭和初期の生活用具を中心に当時の生活について昼と夜に分けて解説し、「生活用具―夏のくらし・冬のくらし―」では、昭和初期に使われた農作業用の民具と、冬に使われた生活用具を中心に展示しました。「人の一生」では、人生の節目の儀礼を集めて紹介し、「清瀬に生きる講の世界」では、清瀬に生きる講の持つ祈りと社交の世界を紹介、「女のくらし」では、清瀬に生きた明治・大正・昭和の女性たちの日常に視点を当て、「子ども歳時記」では、清瀬の風土と子どもたちが育んだ地域性豊かな遊びの数々を季節ごとに展示しました。「清瀬の職人さん」は、清瀬で活躍する6人の職人の仕事を展示し、「紙・竹・藁の民具」では、農家のくらしの中で使われてきた紙・竹・藁の民具を、「くらしの中の文様」では、生活の中で何気なく目にしている文様、例えば障子の組子や襖絵、婚礼衣装、食器などを展示しました。そして「木の民具」では、木の加工方法によって挽物、刳物、結物、曲物、指物に分類展示し、「農家の春夏秋冬」では、昭和初期の農家の生活をテーマに座敷や土間で使っていた生活用具などを展示し、四季に合わせて一部展示替えも行いました。

現在の展示は、開館以来14番目の展示にあたりますが、「養蚕と織物」という内容です。平成18年1月に「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」が清瀬市指定有形民俗文化財になったことを受け、蚕を飼い、糸を引き、織物にして着物に仕立てるまでを展示しています。

なお、本展示は平成18年10月に開催した特別企画「清瀬のうちおり展―糸に託した女たちの想い―」を視野に入れていました。企画展との連動は初めての試みでした。企画展の宣伝にもなり相乗効果を得られたのではないかと考えています。

なお、平成12年2月に大型民具資料の活用として、昭和40年代まで地域の重要な生産物であった麦と米の脱穀・精製に関する道具などを展示した民具ギャラリーを伝承スタジオへ行く回廊内に常設として開設しました。こちらの展示替えは行っていません。

4　まとめにかえて

当館では常設展示室といえども、展示替えの回数が比較的多いので、一つの展示替えごとの詳述は避け、それぞれの展示室について展示の歩みを時系列的に記しました。

歴史展示室では、通史展示→テーマ展示→通史展示と手法を変えつつも、その時々にふさわしい展示へと展示替えをしてきました。民俗展示室では、テーマ展示としてポイントを絞りながら様々な角度から郷土清瀬の民俗について展示解説してきました。それぞれの展示室は担当する学芸員が展示替えを行っています。

展示作業については内容により展示業者に委託して行うこともありましたが、学芸員が中心となり実施する場合はその間の1ヶ月程度展示室を閉室し、作業を進めることもありました。

どういうケースが最善かはその時々により異なると思います。常に最善と思える方法を選択することを心がけて常設展示室の展示は更新されてきました。なお当館では、今後も適当な間隔で来館者のご意見やご要望なども取り入れながら、展示替えを行っていこうと考えています。

5　おわりに

歴史展示室と民俗展示室の展示替えの歩みをご紹介いたしました。展示を行うにあたっては、他機関からのご協力(資料の借用を含む)が無くては成り立たなかったものもありましたことを記しておきます。

当館の展示替えは展示室ごとではありますが、常設展示室の展示替えにあたって参考にしていただければ幸いです。なお、本稿は開館当初より所属する学芸員からの情報や年報などを参考に執筆しました。

特集②　多摩川の自然と文化を考える

三博協では、2006年11年21日（火）に、府中市郷土の森博物館を会場に、「多摩川の自然と文化を考える」というテーマで研修会を行いました。

これまで三博協企画委員会では、多摩地域と関わりの深い専門分野をテーマとした学習会（勉強会）の開催を検討していましたが、「多摩川」をテーマとしたこの研修会がその第一弾となりました。多摩川は、多摩地域の中央部を東流し、自然環境的にも歴史文化的にもたいへん重要なテーマです。

三博協では、今後もこのような多摩に関する学習会を開催し、多摩に関する知識を共有化し、会員相互の情報交換を進めていく中で、共同企画展の開催や巡回展の実施を模索していきたいと考えています。

発表者とその内容は以下のとおりです。

・「多摩川の環境について」（講義と常設展見学）
　報告：府中市郷土の森博物館学芸員　中村武史さん
・「近世多摩川の絵画資料」（資料閲覧と解説）
　報告：府中市郷土の森博物館学芸員　小野一之さん

今回は、研修会でご報告いただいたお二方に、研修の内容をもとに新たに原稿を起こしていただき、会報に掲載することにしました。

多摩川の環境について

府中市郷土の森博物館学芸員　中村武史

概要

流域面積1,249平方キロ（国内50位）、幹線流路延長138キロ（国内23位）で関東地方の1級河川といえば、我らの多摩川である。流域面積は、同じく関東平野を流れる利根川の7.4%にすぎないが、流路延長では43%を占めている。流域面積の割には比較的距離の長い河川と考えていいだろう。

道のりは関東山地南部に位置する雲取山（標高2,018m）、大洞山（標高2,068m）、唐松尾山（標高2,109m）、笠取山（標高1,941m）、倉掛山（標高1,777m）、大菩薩峠（標高2,057m）等で囲まれた地域に端を発する後山川、丹波川（一ノ瀬川、柳沢川、泉水谷などが合流）、小菅川の水を集めて山間部を東へ下り、奥多摩湖の小河内ダムで一旦蓄えられる。その後、雲取山を水源とする日原川と合流し、青梅からは山間部を抜け緩やかな平野部へと移る。

多摩川は一ノ瀬川を遡った先にある笠取山の「水干」が水源とされ、一ノ瀬川が下った先で合流する丹波川（たばがわ）が訛って多摩川（たまがわ）と呼ばれるようになったとする説もある。古くから万葉集にも詠われるほど人との関わりは深く、江戸発展の一助となった灌漑や生活用水としての利用から、流域では明治時代後期までの水田をはじめとする農地としての利用、以後昭和にかけて首都東京の水需要増大への対応に至るまで、様々な紆余曲折を重ねつつ、この21世紀も水の旅は繰り返し続いている。

上流・丹波渓谷

形成

川の力は、大地を刻み、谷を埋め、海に到達する過程において陸地の様相を時々刻々と変えていく。「海」や「湖」といった地球上のあらゆる形態の水の中で、川は意外にも0.0002%を占めるにすぎない規模ながら、その存在は生物の体内を流れる血管に等しく、破れたり詰まったりすれば地球の命取りとなる程、重要な役割を担っている。多摩川の流れも50～60万年前は青梅より東へと流れ、現在の埼玉県入間川のように川越・荒川方面へと進路をとっていたが、狭山丘陵の隆起に伴い流れの方向は丘陵の南側に移動した。その後は度々流路を変えながら上流部の土砂を運び続けて東西45km、南北28kmの巨大な扇状地を形成する。東京の街の中心部を成す武蔵野台地がこれであり、さらに侵食作用によって武蔵野段丘・立川段丘の2つの崖線を生み出した後、縄文時代の始まる13,000年前頃には現在と近い位置に治まったと考えられている。

水源から山間部を流れる上流域では、水が大地を削って形成した谷間を急速に流れる。奥多摩湖に蓄えられた豊富な水は東京都の水瓶とも呼ばれ、流域住人にとっての貴重な生命線である。しかし、この昭和32年に完成した人造湖がその後の多摩川を大きく変えていった。小河内ダムから水量調節して放流される水は、さらに下った先の羽村堰で大半が取水され、羽村線導水路・玉川上水経由で東村山・朝霞の各浄水場に送られる。このため羽村堰より下流の水源は、途中合流する平井川・秋川などの支流と都市排水からの供給のみであったため水量減少を招き、後に水質悪化の引き金となってしまった。さらに流域の都市開発の波は人口増加イコール大量の生活排水を多摩川にもたらし、1970年代には汚れの極みに達したのである。

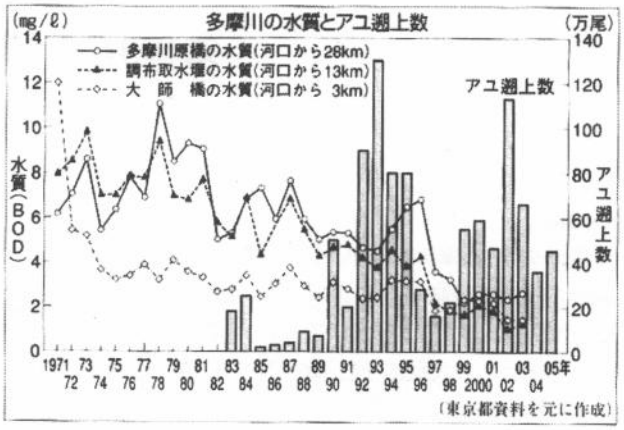
新規

中流～下流域では、上流域から運ばれてきた砂利や土砂が、斜面の緩やかになった大地に広がり中洲や河原を形成する。河原には公園やスポーツ施設などが造成され、かなりの人々が多目的に利用する。また、流域人口が集中するのもこの区域で、実に灌漑用水･生活用水等の利用に基づき、川全体で11箇所ある中の9箇所に及ぶ堰と取水口･排水口が設けられていることも特徴である。70年代の水質汚染拡大を防ぐために設置された下水処理場が、浄化した生活排水を流してはいるものの、今後の自然再生･環境保全に関わる課題が集中するエリアであることは間違いないだろう。というのも、明治29年に制定された河川法は、昭和39年の改正時に水質一貫管理制度の導入など治水利水の体系的な制度の整備が図られ、現在の河川行政の規範となった。が、平成9年に改正の運びとなり、新たに環境整備と保全、及び河川の維持に関する事項が追加された。人々の憩いの水辺空間として、多種多様な生物の生息環境として、また地域の風土や文化を形成する重要な要素としての役割も担う条項が加わったのである。人手の介入する割合が多い流域だからこそ、環境面でより重点的な整備に取り組まなければならない。

中流・府中是政･大丸の堰

魚道

近年の明るいニュースはアユの遡上であろう。生活排水の浄水化で、多摩川の水は30年以上前より確実に綺麗になった。当時姿を消してしまったはずのアユが戻りつつあるのも、水環境が改善されたことに起因する。昨年4月に国土交通省の京浜河川事務所が行った遡上調査では、最下流の調布取水堰において、日最大実測地が35万尾を超えたデータもある。さらに上流の二ヶ領宿河原堰、二ヶ領上河原堰でも日平均23,000 ～ 24,000尾を記録している。但し、水質浄化で即成果がもたらされたわけではない。11箇所に設けられた堰、2箇所のダム、そして川底の地形維持の為に施される床固めを含めた19施設は、治水利水には有効だったが、実は魚の遡上を妨げる壁となっていたのである。環境整備の目的に即して、国土交通省は「川づくり推進モデル事業」として各堰に魚道を設置、川の地形や魚種に合わせた整備はもちろん、魚が見つけやすく、かつ通りやすく、そして土砂が溜まりにくい工夫などを施し、一応の完成を見た。従来の「流して取る」河川の考え方に環境整備を配慮した一例である。しかしながら中流域より上の部分ではまだまだ機能例は少なく、今後の動向を見守りつつも課題は多い。上流部における白丸ダムの魚道では、高低差27mを幾重にも折れ曲がる約270mに及ぶ長さのレールが敷かれており、当初の調査では下流側に放流した魚を対象に実験したところ、1ヶ月で600尾程度しか数えられなかったと聞く。当然、天然物の遡上となれば、さらに数字は落ち込む結果を生んでいる。



田辺陽一著『アユ百万匹がかえってきた』(小学館) より

未来

21世紀に入り、多摩川も未来へ向けて動き始めた。従来の河原景観を回復させるための実験区域として、河口から52km付近の永田地区では河原を覆うハリエンジュ (ニセアカシア) を中心とした樹木の伐採が行われた。堆積する土砂を掘り起こして、玉石混じりの河原を再生しようとする試みである。また、学習フィールドモデル地区として、川崎や狛江、府中をはじめとする流域で「水辺の楽校」が発進、流域全体を博物館に見立てて、地域の児童向け等に情報収集と伝達が活性化している。動き始めたばかりの環境整備とその理解を深めるためのプログラムは形を変えつつ広がっていくに違いないが、まだまだ川本来があるべき姿への修復方法に正解は出ない。

川は単なる取水源や排水路ではない。河原を含めた独自の生態系が確立し、この上ない環境モデルであることを十分に理解し、正しい保全方法を検討することで未来が創造される。当博物館も、展示や自然観察会･講座を通じて地道に理解者を増やしていくことこそ使命と捉え、少なくとも多摩川に関わる者たちが善良なる無関心者にならないよう呼びかけていきたいものである。

下流･河原のにぎわい(丸子橋)

多摩川を描いた絵巻2題

府中市郷土の森博物館学芸員　小野一之

はじめに

多摩が先か、多摩川が先か。『万葉集』東歌に「多麻河伯」「多麻能余許夜麻」の語があり、国府・国分寺跡の遺跡からも「多磨」「玉」の墨書・刻書が見つかるので、古い地名であることはわかる。が、川の名前から武蔵国多磨郡ができたのか、その逆なのかはちょっと微妙である。いずれにしても、多摩川あっての多摩。多摩地域の歴史・文化・自然を考えていく上で、多摩川の存在は欠かせない。

多摩地域に降った雨がすべて多摩川に流れるわけではないが、すべての市町村は本流か支流か分水（玉川上水など）の流域を含んでいる。従って、博物館・資料館において、展示や調査研究のテーマのひとつに多摩川を掲げているところは多い。多摩川は、地質・生物・歴史・民俗・考古・環境・地理などいろいろな分野から総合的に捉えていくべきものであろう。

市域の南側を多摩川に接し、敷地内の丘からはこの川を見渡すことができる府中市郷土の森博物館においても、多摩川が気になる存在であることは言うまでもない。そうしたなか、多摩川に関する近世の絵画資料についても折を見て収集をしてきた。今回は、そのなかから対照的な2つの絵巻物を紹介し、歴史や文学・美術の世界における多摩川像を考えていく材料を提示することとしたい。

歌枕の多摩川――「六所玉河図巻」

天保7年（1836）刊の『江戸名所図会』には写実性の高い737の挿画があり、うち多摩川が画面に入っている絵は9葉ある。ただ、そのうち1枚は過去を想像して描いた場面―河原で行われている布晒しの光景を藤原定家とおぼしき貴族が望見している―であるが、これこそ、和歌で繰り返し詠まれた歌枕を題材にしたものである。

すべては『万葉集』掲載のよく知られた東歌「多麻川にさらす手づくりさらさらに何をこの児のここだかなしき」の1首から始まった。多摩川河畔における布晒しの作業光景は、「玉河にさらす手づくりさらさらに昔の人の恋しきやなぞ」（『拾遺集』）、「手作りやさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉河の里」（『建保名所百首』）などと平安時代以降数多く詠われた。この多摩川のほかにも、全国には歌に詠まれた6か所の玉川があり、それぞれ特定のキー・ワードとイメージを持つ歌枕として定着した（別表参照）。武蔵国の多摩川は「調布の玉川」と呼ばれ、セットでは「六玉川」と称され、近世に絵画化された。

多摩川が、地元の地誌類のほかにも、酒井抱一「布晒し図」や歌川広重「諸国六玉川」を始め、錦絵などにもたくさん描かれたのは、このように歌枕の画題になっていたからである。こうした絵は、必ずしも実景を捉えたものではないが、歴史的・民俗的な背景を反映させ、古典文学と呼応しながら、多摩川がどのようにイメージされてきたかを知る手がかりとなる興味深い資料群である。

2001年度に当博物館が大阪市の古書店から購入した「六所玉河図巻」（巻子本全1巻 紙本彩色 本紙縦305mm長さ4,035mm）は、「六玉川」各場面の絵と和歌を揃えて1巻としたものである。時安尉なる人物が上京時に入江相尚から贈られた狩野為信の絵に、日野輝光ら6名の公卿が和歌を染筆したものであること、元禄15年（1702）以前の成立で、住吉具慶作「六玉川絵巻」とともに、「六玉川」を題材にしたものでは最も古い絵画の1つであることが、入手後に判明した。「調布の玉川」の場面では、竪杵と臼が描かれず、男性が作業に加わるなど定型化する以前の様相を伝えている。

なお、「調布の玉川」については、古代国家の税目との関連から国衙における生産活動に関わる命題であったこと、「六玉川」については、国府近傍や交通の結節点に位置する点から受領国司の往来との関係でこの歌枕を捉えられるのではないか、という見通しを筆者は持っている。多摩川の文学や絵画においても、こうした歴史的な背景が想定できる可能性もある。

歌枕「六玉川」の構成

	名称	伝承地・旧国郡	代表歌	出典・作者	季節・花・景物
①	井手の玉川	京都府綴喜郡井手町 山城国綴喜・相楽郡	駒とめてなを水かはんやまぶきの花の露そふ井手の玉河	新古今集 藤原俊成	春・山吹・貴人
②	三島の玉川	大阪府高槻市 摂津国島上郡	見わたせば波のしがらみかけてけり卯の花咲ける玉川の里	後拾遺集 相模	夏・卯の花・村里
③	調布の玉川	東京都調布市 武蔵国多磨郡	多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだかなしき	万葉集 東歌	秋・柳・布晒し・竪杵
④	野路の玉川	滋賀県草津市 近江国栗太郡	あすも来む野路の玉川萩こえていろなる波に月やどりけり	千載集 源俊頼	秋・萩・川面に映る月
⑤	野田の玉川	宮城県多賀城市 陸奥国宮城郡	ゆふされば潮風越してみちのくの野田の玉河ちどりなくなり	新古今集 能因法師	冬・松・千鳥
⑥	高野の玉川	和歌山県伊都郡高野町 紀伊国伊都郡	忘れても汲みやしつらん旅人の高野のおくの玉川の水	風雅集 弘法大師	高野山・弘法大師

生業の場としての多摩川
――「武州玉川漁人の図」

以上のような、記号化された事象で構成されたイメージとしての多摩川像に対して、いく分なりとも実景を描こうとしたと思われる珍しい絵巻が、今回紹介するもう一つの資料「武州玉川漁人の図」（巻子本全1巻 紙本彩色 本紙縦274mm長さ3780mm）である。2005年度に京都市の古書店より購入した。

六所玉河図巻より「井手の玉川」

多摩川の上流から下流までを詳細にたどる「調布玉川惣絵図」は当時から板行され、今では複製版も作られよく知られた資料である。しかし本資料においては場所を具体的に示す事物がなく、「武州玉川…」と書いた原装と見られる巻子題簽だけがほかならぬ多摩川を示していると言える。全巻を通して途切れることなく続く川を舞台に、前半で「寄せ網漁」、後半で「筏流し」の光景を描く。

六所玉河図巻より「調布の玉川」

「寄せ網漁」は、小舟を用いた網の設置・網の操作、岸辺での漁獲の3場面からなる。網の描写は適確で、下部の金属製の錘は赤茶色、上部の木製の浮子は黄色、網本体はグレーで描き分けている。これを多摩川の伝統漁法のひとつとして近年まで伝えられてきたシラタによる「寄せ網漁」と比較することができる。シラタは木綿の白地の網で、白木の浮子を持ち、錘が川底の石に触れた時に出る音で魚を驚かして追い込む方法をとる。

「筏流し」の場面では、川の渦巻きや、筏が岸に乗り上げた光景が描かれていることに注目できる。渦巻きは筏の難所を示す記号である。ともに「筏流し」の労苦を示す図様になっているのではなかろうか。

以上の点からすれば、本資料における主題は、「漁と筏の生業の場としての多摩川」であろう。しかも、漁獲の場面で、祝儀的な装いで囃している子供たちが描かれていることも勘案すれば、この絵の性格に、実景だけではなく、仕事マニュアル本でもなく、教訓的な象徴性を持った中国伝来のいわゆる「四季耕作図」との関連を見出すことも、あるいはできるのではないか。

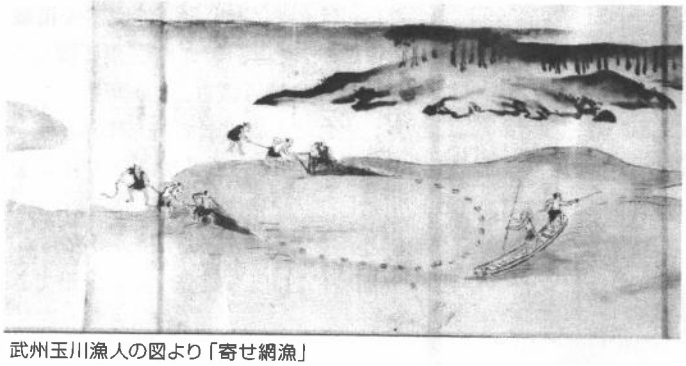
おわりに

本稿は、多摩川に関する絵画資料を通じて、その背景にある文化のようなものを探ろうとした試みのひとつである。もとよりそのためには、多方面からのアプローチが必要であろう。本年度、三多摩公立博物館協議会の研修会で多摩川を取り上げたこともひとつのステップにして、遠くないうちにこのテーマで連携事業を組むことができたらと考えている。

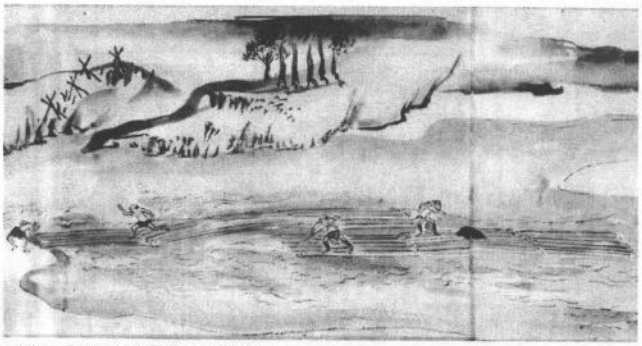
参考文献

酒巻智子「『六玉川』の諸相」（『サントリー美術館論集』6、2002年）

小野一之「武蔵国府と『調布の玉川』」（『府中市郷土の森博物館紀要』16、2003年）



武州玉川漁人の図より「寄せ網漁」



武州玉川漁人の図より「筏流し」

開館10周年記念展示の取り組み

東村山ふるさと歴史館　久保田裕道

東村山ふるさと歴史館は平成18年11月で開館10周年を迎えました。これを機に、普段の展示ではできないことを特別展でやろう、という案が出されました。全職員での会議を重ね、“博物館の裏側を見せる”ことに決定。題して、特別展「あなたのまちのふるさと歴史館」。

コーナーは大きく三つに分け、「しらべる」「あつめてのこす」「ひろめる」と名づけ、導入に歴史館開館以前の文化財保護のあゆみを、最後に「地域博物館の未来」と題した将来への課題を紹介するコーナーとしました。

さて今回、普段の展示ではできないことをやろう、としたのはテーマだけでなく、展示手法についても同様です。専門的な内容はそれぞれの企画展でやればいいわけですから、今回は来館者に「博物館の仕事ってなんだかおもしろそう!」と思っていただけるようなインパクトのある展示を目指したのです。

例えば「しらべる」では床に大伸ばしした発掘現場と古い航空写真を置き、そこに透明なアクリル板をのせて上に立って眺めることができるようにしました。「あつめてのこす」では壁面の大きなガラスケースいっぱいを収蔵庫に見立て、様々な資料が雑多に並んでいる様子を再現してみました。「ひろめる」では、『東村山市史』の作り方と題して市史ができるまでの流れを紹介したり、土器づくりや村山絣の復元といった市民の皆さんとの共同作業の成果を紹介してみました。

それからもうひとつ、職員一人一人の顔が見えてくるようなコーナーを作りたいということで、全職員の似顔絵とプロフィールをパネルにして貼り出し、さらに「わたしのオススメの一品」を持ち寄って展示ということもやってみました。プロフィールも、「タイムマシンがあったらどの時代に行きたいですか」とか「三億円あたったら何をしたいですか」など、学芸員の資質を問われそうな内容もあって、なかなか好評を博しました。

これを機に地域博物館の存在や仕事を少しでも知ってもらえたらと思うのですが、さてどうだったでしょうか。

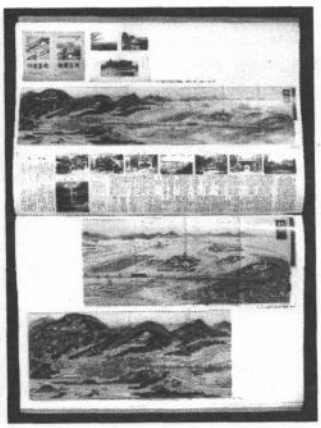
10周年記念展展示風景

特別展「多摩陵・高尾と八王子」の図録

八王子市郷土資料館　戸井晴夫

八王子市郷土資料館の平成18年度特別展は、「多摩陵・高尾と八王子」と題して開催した。八王子市は平成18年に市制90周年を迎え、同時に本館も開館40周年となった。大正15年（1926）10月1日、市制施行10周年を祝った八王子市は昭和改元とともに大きく変貌することとなった。昭和2年、大正天皇の多摩陵が完成すると、全国から参拝者が訪れ、甲州街道の拡幅、市電や京王御陵線の敷設、高尾山のケーブルカーの開通などとともに、玄関口である八王子の街も活況を呈し、全国民の注目するところとなった。この時代を、当時発行された絵はがき・観光案内書・市街図などの館蔵品で紹介することとした。会期は10月1日から11月12日までの延べ35日間、総入館者数4,682名であった。

今回の特別展を開催するにあたっての懸案事項の一つに図録の作成があった。写真パネルを除く展示物が、細密で小型のものが多く、また、多色刷りの色鮮やかな資料が多かったため、これらをそのまま図録に掲載するには従来のモノクロA4判サイズでは制約があったのである。そこで、今回は館初の試みとして、倍のA3判サイズ、ヨコ組オールカラーでの図録作成を決定した。また、図録自体の強度と机上での開閉を考慮して、綴じは天とした。予算の関係から60ページが限界であったため、モノクロの絵はがき等は省略し、展示図録にこだわらずに資料集という形での編集を試みた。この結果、原寸ないしはそれに近い縮尺で資料を掲載することができ、特に地図類に関しては細部まで読み取ることが可能となった。さらに、購入者の持ち歩きの便をはかり、ポリエチレン製の手提げ袋を用意した。結果的には、販売価格1,500円とやや高価であったにもかかわらず、会期中に228冊を販売することができた。



古文書をめぐる助っ人たち
――講座・自主グループ・ボランティア――

府中市郷土の森博物館　馬場治子

「はい、8冊目が出来上がったから持って来たよ」郷土の森古文書勉強会のTさんが真新しい冊子『府中市域古文書解読集8 御用留六 押立町有文書』を届けてくださったのは少し前の事です。「へえ、今度は綺麗な製本ですね」「他の会が印刷屋に頼んできれいなの作ってるからさ、うちもそうしたんだよ」

郷土の森古文書勉強会とは、当館の歴史講座の修了生が作っている、いわばOB会。結成して15年の歴史があります。当初からの会員は歴史講座の1期生でもありますから博物館とは開館以来のお付き合いです。他の会というのはこの会より後発ではありますが、やはり修了生達による比留間家文書刊行会と木の実会のことです。

当館の開館にあたって、地域の歴史を古文書史料を読みながら学んでもらおう、そして、近世文書の読める市民に博物館の助っ人になってもらおう、と目論んでから今年はちょうど20年目になります。初級・中級クラスを設定し、ある程度時間をかけた講座の受講からOB会という形の自主グループへ、という流れはほぼ初めに考えた様に進んできたといえましょう。

これらの会と博物館の間ではいくつかの約束をかわしています。その中で学習する内容について、「テキストは館が収蔵品の中から提供する。そして会はそれを読み終わったら速やかにワープロ打ち・製本して館に提出する」という1条があります。

このため勉強会では、7冊目までは皆で輪転機を回し、製本機を駆使してきたのでした。比留間家文書刊行会と木の実会は、当館だけではなく図書館や周辺市町村にも配れるようにと会員が意図し、初めから多めの部数を刷ろうと経費を積み立てたのです。

諸般の事情で博物館や教育委員会によって速やかな史料集の刊行が難しい中で、市民の自発性に基づいてこれに代るものが蓄積されていることは、大変嬉しいのみならず、ちょっと自慢してもいいと思っています。しかも彼らが止むを得ない場合以外は退会されないところを見ると、結構楽しみながら続いているようなのです。

さらにこの会員のかなりは、博物館ボランティアとしても登録し、未整理文書の整理に来てくださっています。今後も彼らの熱意を削ぐことなく、この成果をもっと地域研究の中で生かせるように、次の手立てを打っていかなければなりません。

2006年度を振り返って

町田市立博物館　畠山　豊

2006年度は、5回の企画展を開催したので簡略に振り返ってみよう。「陶磁のこま犬百面相」（3/28 ～ 5/21）展は、戌年に因むもので愛知県陶磁資料館蔵の陶磁製こま犬約100点を紹介した巡回展。陶磁のこま犬は、主に瀬戸・美濃地方で地域的に分布し関東では珍しいもの。「大津絵と幕末・明治の戯画錦絵」（5/30 ～ 7/17）展は、館蔵の大津絵に故田河水泡氏寄贈他の戯画錦絵を紹介。「星空にあこがれて――プラネタリウムと天体望遠鏡」（7/25 ～ 8/31）展は、小中学生を対象とした夏休みの企画展で、当館講堂に簡易プラネタリウム（1回40人収容）を設置。当館の年間1日当たりの平均入館者数は85.4人であるが、本展では 149.0人を数える好評だった。「おふだの世界」（9/12 ～ 10/22）展は、フランス人日本仏教研究家ベルナール・フランク氏収集資料を紹介したもので、博物館としては海外からの輸送手続き業務などを学んだ。「赤青会コレクション」（10/31 ～ 12/10）展は、鼻煙壺・陶磁器・刀装具・蒔絵などの個人コレクション。

近年の当館の企画展示の特色としては、巡回展の導入と交換展が上げられる。2006年度「陶磁のこま犬百面相」展、2005年度「建築明器」展、2004年度「表現者　河井寛次郎」展などである。このうち「建築明器」展は、当館企画によるもので、愛知県陶磁資料館、細見美術館（京都）、山口県立萩美術館、大倉集古館などを巡回した。また交換展としては、2005年度の「大倉集古館名品展」では、同館蔵の近世・近代の名画（横山大観・夜桜など）を展示したが、これは2004年度に当館蔵東南アジア陶磁器コレクションの貸し出したことによる。また2004年度の「御迎船人形」展では、大阪住まいのミュージアム保管の大阪天満宮所蔵大人形を公開したが、交換とし2005年度に当館蔵故田河水泡氏寄贈戯画コレクションを貸与した。当館企画の巡回展や交換展は、2007年度以降も開催予定である。

展示関係以外の情報としては、2006年3月に久方振りに新人学芸員を迎えたこと、またここ数年来相模原市立博物館と共同調査を続けてきた「境川流域民俗調査報告書」（2006年3月）の刊行が挙げられる。当館は1973年の開館で、本年11月に開館34周年を迎える。

青梅市郷土博物館の18年度の主な事業

青梅市郷土博物館　木下裕雄・小林　弘

古代歴史体験・子ども発掘体験塾

7月28日から8月4日まで青梅市野上町2丁目の霞台遺跡において、青梅市内に住む小学生、中学生13人が参加して子ども発掘体験が行われました。夏の暑い日差しの中、移植ゴテや草掻き鎌を使って、今から約1,700年前の古墳時代の竪穴住居跡を発掘し、お米を炊いたりした台付甕（だいつきがめ）や穀物などを貯蔵した壷（つぼ）など古代の暮らしが感じられる遺物が発掘されました。

また、8月10日、11日には発掘された土器を水洗いする作業などが郷土博物館で行われました。

企画展

今年の青梅市郷土博物館の企画展は、「小説『大菩薩峠』甲源一刀流の巻にみる青梅の情景」と題し、10月11日～平成19年1月14日まで実施しました。長編小説『大菩薩峠』は、羽村出身の中里介山によって著され、その開巻である、甲源一刀流の巻は、現在の青梅市域が舞台です。沢井村の机竜之介邸とその周辺の御岳万年橋、その橋下にある与八の住む水車小屋、武蔵御嶽神社での剣道奉納試合などです。また、青梅裏宿に住む七兵衛も代表的登場人物で、物語の広がりの一端を担っています。

介山は、大正2年（1913）9月から都新聞に『大菩薩峠』を連載するにあたり青梅を訪れ、念入りな取材活動をし、また、大正14年（1925）から昭和4年（1929）頃まで青梅市内御岳、沢井、二俣尾の各地にそれぞれ草庵・道場をもうけ、執筆活動等にあたりました。

この企画展は、『大菩薩峠』の甲源一刀流の巻に出てくる青梅の情景をさぐり、さらに介山の市域における足跡がどのように小説に反映されていったのかも併せて紹介しました。

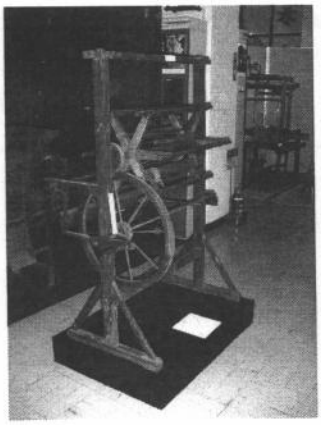
以上が本年の大きな事業ですが、ほかにも当館では、文化財保護事業、埋蔵遺跡の調査、学芸員実習生の受け入れ、文化財地図の改訂版の作成など様々な事業を行っています。

平成18年度企画展「郷土の名産 村山大島紬のできるまで」

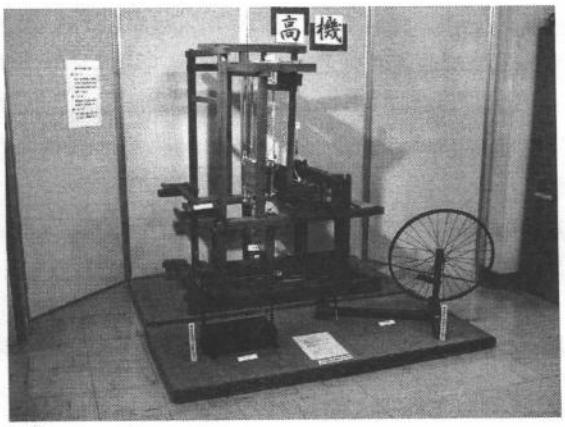
瑞穂町郷土資料館　田中章男

村山大島紬は郷土を代表する近代的産物ですが、服飾文化の推移、原材料の供給難、後継技術者の欠損等によって、現在では持続的継承に困難な部分が生じています。村山大島紬は繊細な技術と複雑な工程を経て製作されるため、全体を展望することが難かしく、企画展では簡潔な五つの動詞、すなわち、養蚕を示す「飼う」、紡織を示す「紡ぐ」、染色を示す「染める」、織物を示す「織る」、仲買から販売に至る「売る」をキーワードとして設定して展示の中核に置くことにより、理解を促すように努めました。専門的な用語に対しては、技術と歴史の説明を施した「関連用語集」を編集しました。「用語集」に収めた村山大島紬成立までの概略を抜粋します。

狭山丘陵の南麓で、江戸時代の文化10年（1813年）頃に、現在の武蔵村山市域の旧中藤村において十字文様の絣が製作され、これが村山大島紬の始まりとされます。明治10年（1877年）の第1回内国勧業博覧会では「村山絣」の製法が記録されており、瑞穂町域では明治時代初期に「箱根縞」が生産されていました。旧箱根ヶ崎村では明治12年（1879年）に木綿織物の市場が開設され、明治20年（1887年）には、箱根ヶ崎村、石畑村を中心とした西多摩郡織物組合ができ、明治22年（1889年）の第3回内国勧業博覧会では、箱根ヶ崎村の小山惣次郎が「織色紺」の織物で褒状を得ました。大正元年（1912年）には、銘仙絣の見本が添付された「銘仙絣　壹疋」が「箱根ヶ崎織物業者代表石塚幸右衛門」から献上されています。大正6年（1917年）以降、武蔵村山市域の旧三ツ木村、瑞穂町域の旧殿ヶ谷村等で伊勢崎銘仙の技術習得が図られ、大正10年（1921年）には八王子織物同業組合村山納税所が設置され、村山大島紬の発展の拠点となりました。村山大島紬の生産額は、戦前においては昭和9年（1934年）に最高に達した後漸減し、戦後は昭和25年（1950年）以降順調に復興し、精緻な板締め絣の技術を高めてきました。



糸揚機



高機

「市川銕琅（いちかわてつろう）作品展」を終えて

調布市郷土博物館　十時俊作

調布市郷土博物館では、国領出身の木彫工芸作家市川銕琅の丸彫り、鉄筆等の作品73点、粉本・原型・雛形・鉄筆等の制作道具1,400点余りを収蔵し、その一部を展示して平成18年11月1日から12月28日まで「市川銕琅作品展」として開催しました。

加納銕哉と市川銕琅

銕琅は明治34年（1901）に国領で生まれ、大正4年（1915）、加納銕哉に弟子入りし、昭和62年（1987）、85歳で亡くなるまで数多の作品を世に送り出しました。

銕琅の師、加納銕哉は近代日本彫刻界の黎明期に活躍した人物です。銕哉は弘化2年（1845）に岐阜県に生まれ、明治から大正にかけて、古美術への該博な知識と卓抜な彫技で独自の世界を築き上げました。加納銕哉は彫刻・絵画に妙技を示し、とくに鉄筆彫りは当時流行の煎茶道と共鳴して一世を風靡しました。この鉄筆彫りとは、金工・木工製品の煎茶道具等に、鉄筆を自在に用い、四季の様子や故事などを図案化し、器物の表面に立体的な表現で、線刻するもので、作品を見た者を驚嘆、魅了させました。銕哉は大正8年（1919）永住を決意して東京から奈良に制作拠点を移し、「最勝精舎」をつくり弟子共々移り住みます。銕哉は大正14年（1925）にこの世を去り、「最勝精舎」は銕哉最後の弟子である銕琅が後継者となりました。

鉄筆をもって銕哉の後継者であることを名乗り上げた銕琅ですが、やがて銕琅の仕事は地元の伝統工芸である奈良人形、奈良一刀彫を受け入れながら、写実的な表現の木彫制作へと移行していきます。丸彫りと呼ばれる作品は、銕哉ゆずりの古典的な感覚の作品、寺社に残る仏像や能面など先人の作品の写し、彩色を施した奈良人形にも通ずる艶やかな作品など多岐に渡ります。

作品紹介

［指月布袋和尚像］作品は、淡彩色で仕上げられているため、木目や細やかな鑿跡が際立っています。衣装の文様には金彩が施され、布袋の持つ袋には銀泥が薄く塗られています。

指月布袋和尚像

［高士観瀑］凛として立つ高士と三頭身にデフォルメされた持童のバランスが絶妙です。持童と高士の視線の先が滝の大きさを表しているとともに、高士の視線は滝を見ていながらもっと大きなものを見ているようです。

高士観瀑

展示を終えて

調布市ホームページの展示情報と調布市立図書館のホームページにある「市民の手による・まち資料情報館」の市川銕琅コーナをリンクさせたところ、市外からの来館者が明らかに増え、煎茶道の関係者と思われる方もみえました。また、インターネット上のオークションで銕琅作品の出品が増えるという現象が生まれました。

市川銕琅は、師匠の命により展覧会等の出品をほとんどおこなっていませんから、知名度はあまり高くありませんが、知られざる名工ともいえます。当館では、今後も銕琅作品の紹介と研究を通して銕琅の技に光をあてていく活動を展開していきたいと思っています。

里山文化の再生と保存にむけて

羽村市郷土博物館　宮沢賢臣

羽村の里山

羽村市郷土博物館の「雑木林」といってもなかなかピンとこないかもしれません。草花丘陵の裾の一角に位置する当館の裏には、丘陵から続く雑木林が広がっています。管理が行き届いているとはいい難く、落ち葉が厚く堆積しているような状況です。

多摩地域ではどこでも同じでしょうが、羽村でもかつては「雑木林」が生活にはなくてはならない存在でした。「里山」とも称される林は、地元では「ヤマ」と呼ばれています。大きく育った樹木の伐採や枝払い、落ち葉掃き（クズハキ）は重労働でしたが、手を入れながら大事にヤマを育てていました。昭和30年代、我々の生活が大きく変化し、ヤマの存在意義であった「薪」「粗朶」「落ち葉」がいらなくなり、ヤマも次第に管理されなくなってきました。人々の生活からヤマは忘れ去られつつあるのです。

企画展の開催

平成18年度の当館のテーマに、「里山文化の再生と保存」を掲げ、様々な取組みを実施してきました。中でも秋に開催した企画展「『ヤマ』のある生活」は、当館裏に広がるクヌギやナラを中心とした雑木林を、里山として保存する活動に先駆けて、その歴史や文化を、収蔵する関係文書や農具等の資料を用い、古老からの聞き取りを行い、わかり易く紹介し、市民への啓発という意味では大変有意義な展示となりました。

会　期　平成18年10月29日（日）～12月24日（日）

観覧者　7,474人

今後の展開

今後は、里山に不似合いな高木を伐採して、0からの里山作りを、市民の皆さんの参加・協力を得ながら、長いスパンで実行していく予定です。

福生市郷土資料室　ホームページ開設

福生市郷土資料室　菱山栄三郎

時間がかかりましたが、やっと福生市郷土資料室のホームページが完成しました。ここ数年、予算上の問題もあり、なかなかホームページが開設出来ず、正直なところ多摩の博物館のなかでも遅れをとっていたような気がしていました。そこで本年度から制作に入ると、密度が濃く、多くの情報を提供するホームページをめざし、作りこみを行ないました。その結果、よいものが完成したと感じています。今回はこのホームページを紹介します。

平成18年12月にホームページが開設されました。この特徴はなんといっても当資料室が所蔵する資料を検索できる「収蔵資料検索システム」があることです。資料のキーワードや名称・分類項目などで検索が出来、現在約2400件の収蔵資料を画像と解説付きで紹介しています。これは収蔵資料台帳を平成3年に電算化し、このシステムをベースとしたものです。しかし、電算化したデータの中にも不備が多く、資料の写真撮影や採寸など、データの再整理に約半年の時間がかかってしまいました。早い時期に電算化をしたために、初期の画像データは粒子が荒かったり、モノクロ写真であったりしたためです。苦労はありましたが、この「収蔵資料検索システム」によって、普段展示をしていないと見られない資料が閲覧可能となりました。今後は残りの収蔵資料データの再整理を引き続き行ない、整理が完了した資料から順次公開していく予定です。

さて、ホームページは一度作ってしまうと、お知らせや事業案内などの更新以外は、あんまり変化がないことが多く見受けられます。福生市郷土資料室では、利用者の方々に変化を感じていただくよう、今後もホームページを進化させていく計画です。季節ごとの表紙写真の入れ替えや子どもページの増設、トップで紹介している特定収蔵資料の差し替えなどを予定しています。このような運営･管理が業務の大きなウエイトを占めていきそうなので、あんまりやりすぎて普段の仕事や他の事業などを圧迫しないことを祈るばかりです。

最後になりましたが、ひとりでも多くの人がこのページを見て、福生や多摩の歴史・民俗に興味を持つことを願っています。

福生市郷土資料室のホームページアドレスは以下のとおりです。ぜひご覧ください。

http://www.museum.fussa.tokyo.jp

五日市郷土館はおもしろい

――「五日市鉄道」展に2,500人が来館!!――

あきる野市五日市郷土館　原田辰生

五日市郷土館には、市民から寄贈された民具・古文書・化石等、多くの収蔵品があります。地元の小・中学校の教材として有効に機能し、市民や多くのリピーターを増やすため、今年度は整理･整頓を行い、良好な環境作りを進めるとともに、将来的には市生涯学習センターの市民解説員が常駐できるような郷土館運営を目指しました。

常設展示室では「五日市憲法草案のレプリカ（一部）」の展示、郷土の古文書コーナーの新設、郷土の伝統工芸「軍道紙」製作用具の展示等を行いました。

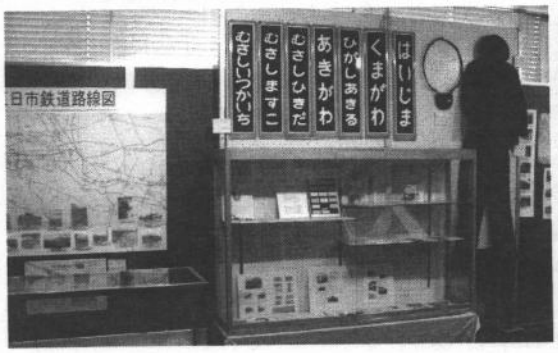
前期企画収蔵展では、収蔵用具をもとにして「はかり・アナログの世界」で各種の測る・計る・量る用具とこれらを利用した機能的な生活用具を展示し、後期企画展では、JR五日市線の前身で大正14年4月に開通した「五日市鉄道」を地図や写真により、その変遷を観察する展示をしました。この展示は多くのメディアにも取り上げられ、市内外多くの人達に見ていただきました。この二つの企画展の間には、館蔵写真展として民俗・風景を中心とした「刻まれたモノクロームの世界」を展示しました。

また、都指定文化財である中村家文書の寄贈を受け、これを記念して特別展、講座等の事業も実施しました。

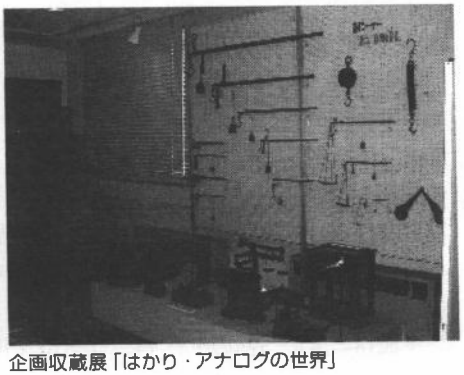
なお、敷地内に建築されている江戸時代末期の養蚕農家「旧市倉家住宅」では、四季折々の年中行事を体感できるできる展示や、市民参加の芋掘り・脱穀・餅つき等のイベントを行いました。

これらの多くのイベントが、短期間で内容を充実（自画自賛ですが）して展開できたのは、職員が協調して管理運営を行った成果であると思います。

今後も、展示内容の充実と、常に来館者を気持ち良く迎える環境を整えていきますので、この記事を見られた方は是非おいでください。



企画展「五日市鉄道」


企画収蔵展「はかり・アナログの世界」

清瀬市指定有形民俗文化財
清瀬のうちおり展―糸に託した女たちの想い―
＜開館20周年記念特別企画＞

清瀬市郷土博物館　柳澤 剛

「清瀬のうちおり展―糸に託した女たちの想い―」は、10月14日（土）から10月29日（日）までの日程で、昨年1月に指定された市有形民俗文化財「清瀬市及び周辺地域のうちおり衣料」の中から97点とそれに関連する資料等を実物資料や映像を用いて紹介しました。これは、当館の開館20周年記念として行ったもので、ギャラリーをはじめ全館を挙げて開催しました。

清瀬市及びその周辺地域では、昭和20年代頃まで家で取れた屑繭、木綿糸、賃機の残糸、絣糸などを使って「うちおり」を織っていました。「うちおり」と呼ばれる衣料は、商品として織られた衣料ではなく、家族や自分のために織られたもので、現在の工業製品の衣料とは違った魅力があります。今回展示した衣料は、着物類や裂（きれ）など明治から昭和20年代までのもので、絹布が多数を占めますが、綿布や絹と木綿の両方を使用した絹綿交織、その他裂織（さきおり）などがあります。かつて機屋をしていた家の蔵から出てきた木綿の古裂や、かつて紺屋をしていた家の藍甕（あいがめ）なども参考資料として展示しました。

また、「うちおり」について理解を深めていただくために、小此木エツ子氏（多摩シルクライフ21研究会代表）による糸繰りと真綿作りの実演や田中優子氏（法政大学教授）による講演会をはじめ、裂織・和裁でのコースター作り、繭から蛹を抜き真綿にしての藍染め、真綿と毛糸を使った手編みのアクセサリー作りなどの関連事業も実施しました。また、清瀬市男女平等推進室（本展協力部署）が発行した『麦畑をかけぬけて―聞き書き 清瀬の女たち―』の製作過程で聞き取りをさせていただいた方々の中から4人が話者になって、「80代女性が語る昔の暮らし」と題したお話会も行いました。市民等の方々にご協力いただき、行政と市民等が一丸となって行った本展は、どの事業も予想を上回る参加者で、会期中に約3,500人の方々にご来場いただきました。

そして、本展開催にあたり図録『うちおり―糸に託した想い―』を発行しました。市内在住の写真家安齋吉三郎氏により撮影された図録は、民俗資料にとどまらず美術資料としての評価も高く、1冊2,000円にて好評発売中です。

なお、本展で展示した資料を含む「うちおり」関連資料は東京都指定を目指し、今後更に調査・研究していく予定です。

特別展と資料調査
平成18年度特別展「むらやまの中世―市内に残る板碑と中世陶器」の報告から

武蔵村山市立歴史民俗資料館　堀部由美子

武蔵村山市内板碑の悉皆調査は、昭和50年代に実施され、その成果は昭和56年発行の『武蔵村山市文化財資料集一　武蔵村山市の板碑』にまとめられています。

しかしながら、その調査から20年以上が経過し、所有者の代替わりなどもあり、板碑の紛失や所在不明といった問題が発生していました。また、その間に新たに発見された板碑も確認されています。

そこで、市内板碑の追跡調査を兼ねて、改めて板碑の所在確認調査を実施するとともに、その成果を盛り込み、特別展を開催する運びとなりました。

具体的には今年度の特別展準備では、昭和56年発行の資料集に掲載されている板碑所有家を一軒一軒たずね、可能であれば板碑の収蔵状況なども確認させていただきました。

特別展「むらやまの中世」展示風景

このような調査の中で、板碑所有者の方から新たに板碑の所在情報が寄せられたり、所有者の方との調整の中で、板碑や中世石造物など、あわせて15点余の中世資料を資料館に寄贈・寄託していただくことができました。

しかしながら、今回行った板碑の所在確認調査でも、所在は明らかではあるものの屋外の墓地にコンクリートで固定されてしまったものや、家の改修の際などに所在不明となってしまったものなども確認されました。

このように、当館では特別展などの展示活動を軸とし、展示で扱う館蔵資料のより詳細な台帳作成、さらには市内所在資料の掘り起こしを意識し、系統的な資料整理を行うよう心掛けています。

今後も特別展をはじめとしたひとつひとつの展示を、資料の掘り起こしと蓄積、活用の機会と捉え、市内の文化財所有者との連携を図りつつ、資料館活動を展開していきたいと考えています。

農家の暮らしを“実体験”
――古民家園の通年体験学習事業――

立川市歴史民俗資料館・伊藤隆之

立川市域の北東、幸町4丁目に「川越道緑地古民家園」があります。園内には、江戸末期に建てられた築150年以上の歴史を持つ入り母屋造りの茅葺き民家・小林家住宅があり、市の指定有形文化財となっています。

この古民家園を会場に、平成16年11月、新たな事業『通年体験学習事業』がスタートしました。

この事業は、古民家園をただ単なる見学施設に終わらせることなく、建物を見ただけでは分からない農家の暮らしを理解していただくため、農作業や年中行事などを一年間通して実際に体験する「体験型」学習事業として開設されました。事業の趣旨は、農作業については、麦の種まきから始まって、夏の暑い時期の除草や堆肥作りなどの一連の農作業を経て収穫につなげ、農作業の大変さや収穫の喜びを肌で知っていただくこと、また年中行事として、農家で昔から伝えられてきた十五夜飾りやまゆ玉飾りなどをあわせて体験していただこうというものです。

事業開始にあたって利用基準を制定、これにより火を使っての食体験学習も可能となりました。事業は麦の耕作が始まる11月からスタートし、さつまいも収穫の10月までの一年間。プログラム数は16。農作業関係は10、年中行事関係ほかが6（うち食体験が3）で、活動日は原則として日曜日の午前10時から2～3時間となっています。口コミで伝わるようで年々参加者も増え、第3期を迎える今回は42人が登録。小学生から高齢者まで幅広い年齢層の方が参加しており、家族ぐるみでの参加もあって、アットホームな雰囲気のなかで、異世代間の交流が図られているのも特色です。

何より人気なのは、やはり食体験の学習で、正月には「七草がゆ」、春に「餅つき」（菱餅）、秋には「手打ちうどん」を作りますが、みんな試食が楽しみ。うどんの粉や麦茶、麦わら細工で使う麦わらは自分たちで育てた自家製のものです。実施にあたって苦労するのは、開園当初、体験学習の計画がなかったことから、設備面が整備されていず、台所道具をその都度資料館から持ち込まなければならないことで、今後の課題です。

始動した幻の真慈悲寺調査推進プロジェクト

日野市郷土資料館　中山弘樹

日野市はまちおこし・地域活性化のための施策を近年相次いで、打ち出している。「新選組のふるさと」をアピールする各種取り組みは先刻ご承知のことだと思われるが、市南西部の平山地区の活性化のために、「平山季重フェスタ」も年に一度開催されるようになった。

こうした流れの中で、市南東部の地域おこしの一環として「幻の真慈悲寺調査推進プロジェクト」が、昨年の9月17日から活動を開始した。

「幻の真慈悲寺」とは、鎌倉幕府の公式歴史書「吾妻鑑」に2度その名がみえるものの、長くその所在地が明らかでなかった中世の寺院である。

1990年代に行われた京王百草園内の発掘調査で数千点に及ぶ中世瓦が出土したこと、京王百草園に隣接する百草八幡神社には「武州多西吉富真慈悲寺」「建長2（1250）年」と背銘のある阿弥陀如来坐像が伝来していることなどから、真慈悲寺は今の京王百草園から、その東方にかけての丘陵上に展開していた可能性が高くなった。

「幻の真慈悲寺調査推進プロジェクト」は、「真慈悲寺と百草・倉沢・落川・三沢などの周辺地域に関する調査事業を推進し、これら地域の歴史・文化・自然が他に替えがたいものであることを確かめ、後世に引き継いでいくこと」（「幻の真慈悲寺調査推進プロジェクト申し合わせ」より）を視野にいれた、行政、地域自治会、市民研究団体、土地を所有する企業などから構成されるコンソーシアム（協働事業体）で、郷土資料館が事務局をつとめている。当面は2年間を活動の期間とするが、長期に及ぶ事業であることを念頭に置いている。

郷土資料館では、このプロジェクトに備え、調査の中核を担うべきボランティアを30名ほど養成してきた。現在は、京王百草園内から出土した大量の瓦の整理作業や、周辺地域の中世に遡る寺院の見学・瓦の見学などを行なっている。4月以降は京王百草園やその東の丘陵部の測量・地中レーダー探査・発掘調査なども進める予定で、ボランティアも何らかの役割を果たすことが期待されている。

活動の成果は、プロジェクト構成員に限らず、一般向けにも現地見学会、講演会、シンポジウムなどで公表し、紀要などを通しての報告も行なっていく予定である。皆様からのご教示・ご助力をお願いする次第である。

ようこそ！くにたち郷土文化館へ

くにたち郷土文化館　濱中秀子

「国立」というと中央線の国立駅周辺の近代的イメージが強いのですが、国立にはもう一つの町の顔があります。それは甲州街道を中心とした昔からの本村地区と呼ばれる地域で、街道沿いの家並みが静かに歴史を伝えています。また谷保天満宮からハケ下に今も見られる田んぼや用水路・梨畑などは、開発が進んでしまった今となっては貴重な環境財産となっています。そしてこのハケ沿いに建てられた「くにたち郷土文化館」は、この国立市南部に広がる歴史と環境、そして国立駅周辺の町との架け橋となるべく存在しています。

年間を通じて地域の伝統文化を継承するため多くの行事を「国立市古民家・旧柳澤家住宅」（市有形民俗文化財）で行い、田んぼでは「われら稲作人」という稲作体験事業も行っています。

一方、展示活動では、開館十年を経てなお取り上げられていない時代もあり、また多くの方に本村地区の歴史の深さを知っていただきたいとの願いを込めて、平成18年度の主催企画展では幕末から明治の自由民権運動初期に活躍した本田家を取り上げました。「幕末から自由の権へ―本田家の人々が見た時代―」と題し、多くの方にご覧いただくことが出来ました。

この展示をきっかけとして、国立のもう一つの顔である本村地区の歴史に興味を持つ人が増え、研究が更にすすむことを願っています。

また、教育普及活動の中では「くにたちの暮らしを記録する会」を案内者とし、市内の小学三年生に昔のくらしぶりを伝える「民具案内」を毎年行なって来ました。平成18年度はより理解を深めてもらうため、平成17年度の民具展示「暮らしと共に―ちょっと昔の道具たち―」をもとに、小学生を対象とした企画展「むかしのくらし～あかるい夜・あたたかい家～」を開催しました。常設展示ではなかなか取り上げられない「民具」の準常設展示化をも意図するものです。

平成19年度企画展は、日本で最初の知的障害児施設滝乃川学園と、その創立者夫妻について取りあげます。ぜひご来館ください。

「幕末から自由の権へ―本田家の人々が見た時代―」展示室全景

企画展「写真でたどる小金井の昭和」を開催して

小金井市文化財センター　多田 哲

第二次大戦、戦後の復興期、高度成長と目まぐるしい変化を遂げてきた昭和期は、武蔵野の純農村であった小金井にも計り知れない影響を与えました。村から町、そして市へと発展していく過程で物質的経済的利便性を得た半面、身近な武蔵野の自然や人々の濃密な精神的紐帯など、失われたものも多大です。そこで今回、「写真でたどる小金井の昭和」と題して、昨年の11月3日（文化の日）から今年の3月21日（春分の日）まで、市民から寄贈していただいた画像のストックを用いて、改めて昭和という時代を振り返る写真展を開催しました。

小学校の見学

今回、昭和初期の写真に重点を置く形になりましたが、カメラや写真が貴重品であった時代、ハレの日の家庭や団体の整列した記念写真が多く、何気ない日常の風景や生活のひとコマを写した写真は貴重です。被写体・画質などを考慮すると、展示できるレベルのものは以外に少ないのが現状です。多くの来館者に好評だったのは、「ハケと野川」や駅周辺の写真で、現在の馴染み深い町並みや景色と比較するのが容易な点にあるようです。また、敗戦直後の人々の表情が意外に明るいことも関心を呼んでいました。

小金井市は、平成20年（2008）に、市制施行50周年を迎えます。その時また改めて、昭和期の画像の集積が陽の目を見る機会に恵まれ、役立つかも知れません。開催中にも早速、今回の写真展をきっかけに、市民の方から画像提供の申し出があったのは、所期するところの収穫でした。

メイキング・オブ・収蔵資料展

東大和市立郷土博物館　木村 敏

郷土博物館では、一般市民の方々が使っていた生活道具、いわゆる「民具」を収集しています。畑で使う農具や衣食住に関するもの、最近では家電製品なども対象としています。基本的には、使わなくなったものを「寄贈」していただくので、種々雑多な道具が集まっています。

この雑多な民具の中から、あるテーマに沿った資料を抜き出して展示するのが「収蔵資料展」です。今のところ1年おきの年度末～次年度当初に開催していますが、これまでのテーマと内容は次のとおりです。

	テーマ	開催時期	主な展示資料
第1回	ムギの民具	H9 ～ 10年度	種まき器、脱穀機、唐箕
第2回	お茶の民具	H11 ～ 12年度	茶刈バサミ、蒸し器、ホイロ
第3回	はかる民具	H13 ～ 14年度	棒バカリ、モノサシ、時計
第4回	はこぶ民具	H15 ～ 16年度	大八車、肥オケ、電話機
第5回	音の民具	H17 ～ 18年度	ステレオ、テレビ、風鈴

テーマの決定とそれに沿った資料の選択は密接に連動していて、収蔵資料を見わたしながら設定できそうなテーマを考える、というのが実際のところです。例えば収蔵庫にあるリヤカーをきっかけに、これを展示できるテーマを考えます。そして「運搬」というキーワードにたどり着くと、それに関連する収蔵資料は他にどんなものがあるかを確かめます。大八車、コエオケがすぐ見つかります。大八車からクズ掃きのカゴ、コエオケからはテオケへとつながります。あとは運ぶ→移動から自転車、移動→伝達から電話機と連想ゲームのように広げていきます。これで展示室を埋められるだけの資料を見つけられれば展示テーマの決定です。

珍しい資料を活用したくても他の資料と結びつくテーマが見つからなかったり、逆に、思いついたテーマに合う資料が数点しかない場合などは、ゼロから考え直さなくてはなりません。テーマに合う資料を購入あるいは借用できれば、もう少し気楽にテーマを決められるでしょう。でもあくまで「収蔵資料展」ですから、限られた民具を何かでひとつにまとめることが求められます。

次のテーマを何にするかが、頭痛の種の一つですが、糸口が見えた時の楽しさもあります。最近では民具の寄贈を受ける時に、これならどんなテーマがあるかな、と考えるようにもなりました。とはいえ、いつも無い知恵を絞っている状態なので、だれか知恵を貸してください。

身近な自然もおもしろい！
――「多摩の生きもの探偵団」を通して学んだこと――

パルテノン多摩歴史ミュージアム　仙仁 径

2006年の8月と9月、「多摩の生きもの探偵団」（以下「探偵団」）と題する子ども向けのワークショップを開催した。生きもの探しを探偵に見立て、生物の世界で起きた「事件」を、参加者の子どもたちが観察しながら解決していく、というコンセプトのもとで実施した。初めて行う事業であったため、あらゆることが手探り状態であった。本稿では、探偵団開催までの経緯を簡単にご紹介したい。

4月、担当となった私がまず始めたのは講師探しであった。当館では市民団体「多摩市植物友の会」（以下「植物友の会」）と共同で毎月「みんなの植物観察会」を開催しているが、植物友の会のメンバーに相談したところ数人が講師に名乗りを上げてくださった。さらに友人の協力を得て、昆虫の専門家2人も講師としてお願いすることになった。

次に取りかかったのが、探偵団の具体的な実施方法についてである。植物友の会有志と定期的に会合を持ち、内容を詰めていった。探偵団が解決する事件については、会場を植物友の会有志と事前に歩き、どのような生物が観察できるのかを確認した上で、なるべく生物間の関係（捕食－被食等）がわかるようにストーリーを組み立てた。本番直前の下見では昆虫専門家2人も参加し、「クロヤマアリの女王は20年近く生き昆虫類では最長命（しかも交尾は生涯一回のみ！）」等のさまざまなうんちくに植物友の会有志が目を輝かせて聞き入っていたのが印象的であった。

そして当日。8月の開催日は当館の博物館実習期間であったため、実習生たちに探偵団の補助をお願いした。彼らには子どもたちを見守る程度の仕事をお願いしたつもりであったが、積極的に講師と子どもたちの橋渡し役になり、めざましい活躍ぶりであった。そのため9月の回でもボランティアで補助をお願いし、大いに助けてもらった。主役の子どもたちにはやはり昆虫類が大人気で、大人より上手に昆虫を見つけ出していた。また9月の開催日には当館所有の電子顕微鏡で生物を観察し、子どもたちは画面を食い入るように見ていた。

開催後の反省会では、事件簿に出てこない生物の観察がおろそかになってしまったことなどいくつか重要な反省点が挙げられたが、自分を含めた関係者と子どもたちすべてが楽しめた事業であったと自負している。また、私にとっては事業がいかに多くの方に支えられているのかを理解する良い機会でもあった。

檜原村郷土資料館の活動

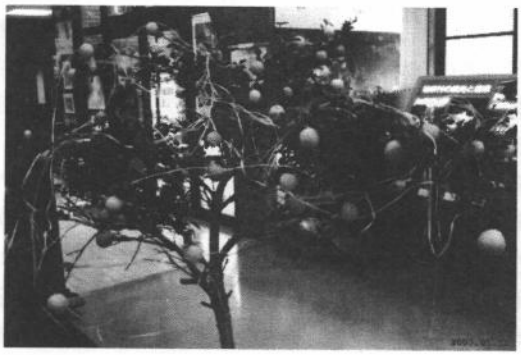
檜原村郷土資料館　大谷　健

檜原村郷土資料館では、「自然と観光」「歴史と民俗」の2つをテーマに、景観や動植物、遺跡発掘時の出土品及び民具や兜式入母屋造りと呼ばれる古民家の模型などを展示しています。

また、村の祭りを紹介するレーザーディスクや「自然と歴史」を紹介するDVD放映が常時可能となっています。

常設展では「村の自然」「村の歴史民俗」「檜原村の自然の写真」を展示しています。

特別展では、時期により「繭玉飾り」「七夕飾り」「祭の写真展」「野鳥の写真展」等を展示しています。平成18年度は小学校の作品で「バードカービング」を特別に展示しました。


繭玉飾り

バードカービン展

檜原村の自然に囲まれた村で、昭和30年代までは林業が盛んであった村ですので、平成19年度は、林業にまつわる道具とか写真展などの展示を予定しています。

また、村には民俗芸能が数多く残っており、特に獅子舞は各地区にあり、獅子舞だけの写真展も計画をしたいと思っています。

全国文化財集落施設協議会の取り組みについて

江戸東京たてもの園　高橋英久

江戸東京たてもの園はご存じの通り、建造物を扱った野外博物館である。当園と同様に日本には全国各地に民家などを移築している野外博物館が点在している。それぞれの地域で特徴ある文化遺産を後生に伝えることを存在意義としている。建造物はその土地の気候風土に合わせた形で造られることがその大きな特徴である。日本列島には南北に長い地形的特徴から、寒暖により独特の生活の仕方と様々な形の建造物が見て取れる。

全国各地、そのような建造物を扱う公立・私立、規模の大小の枠を越えた博物館の有志で作った組織が、全国文化財集落施設協議会である。毎年一回の総会を開催し、平成18年度で第34回を数える、実は歴史ある団体である。加盟館は紆余曲折を経て、平成18年度現在、北海道開拓の村、福島市民家園、川崎市立日本民家園、（財）三渓園保勝会、野外博物館合掌造り民家園、飛騨民俗村、福井市おさごえ民家園、日本民家集落博物館、（財）四国民家博物館、江戸東京たてもの園、いわき市暮らしの伝承郷、さらに友好協力団体として博物館明治村が加わっている。

協議会は、文化財建造物及び民俗資料の保存と公開・修理・管理等に関する情報連絡及び会員機関相互の親睦を図り、併せて文化の発展に貢献することを目的とし、年一回、会員館での見学会と総会が行われる。総会では、施設の有効活用、維持・保存・管理の施策、より強固なネットワークの構築方法、ボランティア制度の導入・運営等について同じような境遇のもと、それぞれに抱える問題を議論する場となっている。しかし実際には、各々の館の実態の相違から、問題に対しての明快な解答を得られないことも多々あるが、重要なのは、協力関係を築き、情報を共有することである。そして、そこから発展することの努力を怠らないことであろう。何よりも同じような施設の存在というものは心強く感じるものである。

今後の課題は、博物館を取り巻く環境が変わっていくなかで、これまで以上の強固な関係を構築しながら互いに切磋琢磨し、いかに効率的な運営を目指していくべきかを考えていかなければならないことである。さらに加盟館を増やし、全国津々浦々、様々な建造物を扱う施設と連携し、情報の蓄積と、確固とした組織体制を作り上げ、民家ファンにはたまらない協議会の存在でありたいと強く思っている。

例会の様子

施設内見学の様子（北海道開拓の村）

企画展示と体験教室

東京都埋蔵文化財センター　竹尾　進

平成18年度は、常設展示に加えて企画展示「縄文人のくらし」を開催しました。昨年度当センターが過去に発掘調査の記録映像の中から編集を行って15分の映画「縄文人のくらし」を制作したものに合わせた展示テーマにしてみました。展示では多摩ニュータウン遺跡出土の遺物だけでは十分に説明しきれないことから、他館から貴重な遺物を借用し、多摩地域の皆さんに分かり易い展示になるようにしてみました。

センターの団体は年度始めの小学校の見学が殆どであり、教科書ではあまり触れられない縄文時代について、親しみやすく、色々な体験を通して学習に役立つように心がけて展示を行っています。その例として、マネキン人形に装身具や衣服を着けた縄文人に直に触って肌で感じてもらうことにしました。例年の本物の縄文土器に触れるコーナーの他に縄文土器の立体パズルを新たに設置し、また木の実を石皿の上で実際に磨り潰して粉にする体験なども行いました。これらのコーナーは楽しく学んでもらい小学生にとって貴重な体験となるのではと思いましたが、我々の意図するものとは裏腹に遊び感覚で終わってしまう傾向にあり、我々としても今後の展示工夫に課題が残ってしまいました。

展示テーマに関連して文化財講演会を6回行いました。最近では演者も実演を織り交ぜながら講演をしたり、工夫を凝らした飽きない講演会だったと思います。体験教室では沢山の方が参加していますが、今回編布作り教室の参加者の中から希望者を募って、植物から直接糸を作るところから始めて、縄文時代のベストを一着編み込む作業を10日間かけて体験をしてもらいました。

体験教室参加者のニーズも多様であり、今後の企画には、最初から最後まで参画できるような教室を計画していくように努めております。そこで平成19年度では、古代のカマド造りから始めて、米を炊き、食事できる全工程を実施する予定でいます。

是非参加してみたいと思われる方、一緒にやってみませんか?

UR都市機構都市住宅技術研究所　特別公開

集合住宅歴史館　大木真理子

集合住宅歴史館は、UR都市機構都市住宅技術研究所で公開している施設の一つです。

新規展示資料については、特集の中でご紹介していますので、そちらを参照していただき、ここでは都市住宅技術研究所が年一回開催しています『特別公開』についてご報告いたします。

《特別公開》

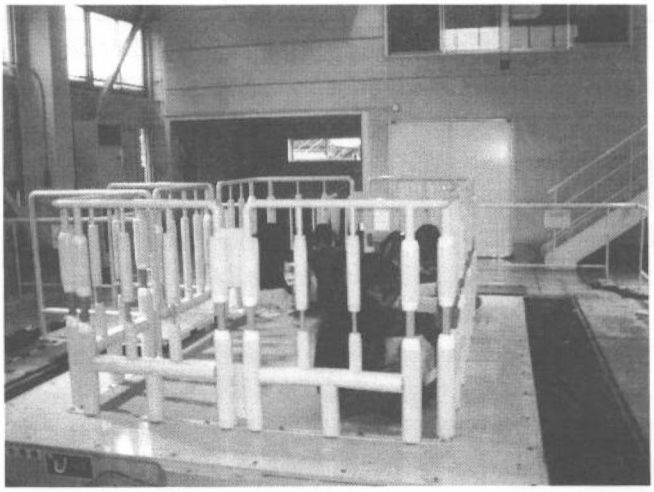
都市住宅技術研究所では、研究所内の6つの施設を一般公開しています。予約制になっており、ご覧いただける施設も時間帯も限られていることから、年に一回、「特別公開」として通常一般公開していない施設も含め、予約無しで一日中自由に研究所内をご見学いただける日にちを設けています。本年度は5月末の土曜日に開催しました。

《集合住宅歴史館では》

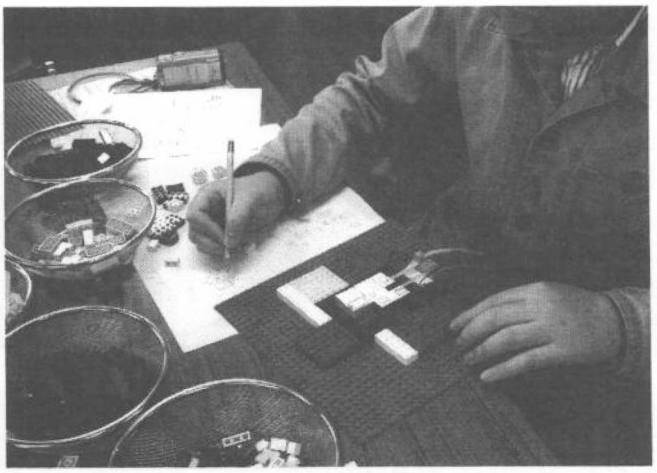
通常の一般公開の際は案内担当の者が引率し、ご説明しながらご覧いただいているのですが、特別公開ではじっくりご覧いただけるようにとの趣旨で集合住宅歴史館では説明員をつけていませんでした。

しかしながら、説明も聞ききたいとのご要望もあり、昨年度の特別公開から通常の一般公開と同じスタイルで、“集合住宅歴史館ツアー”として説明をお聞きいただきながら見学できる時間を3～4回ほど設けました。こちらも多くの方に参加していただくことができました。

説明を1時間弱聞いていただいた後じっくりと見なおしていく方、一度他の施設をご覧いただいた後に再び戻ってご見学される方、移築住戸内のちゃぶ台を囲んで和んでいる方…など、通常の限られた時間でご覧いただく施設見学とは違ったお客様それぞれの見方を私どもも窺うことができました。



一般公開していない振動実験棟では地震体験をしていただきました。



「チャレンジKSIプランニング」
組み立てブロックを使って住宅の間取りを考えます。

《コンペ企画も登場！》

今回の特別公開では、学生の方を対象とした催しも行いました。学生さんのやわらかい頭脳と大胆な発想を期待し、その一つは「求む！超・改造指南。昭和40年代の住宅はこう変わる」と題し、UR都市機構で供給しているUR賃貸住宅77万戸のうち約半数を占める昭和40年代（築30～40年）の団地の“超・改造案”を、①間取り部門、②共用玄関・廊下部門について募集しました。

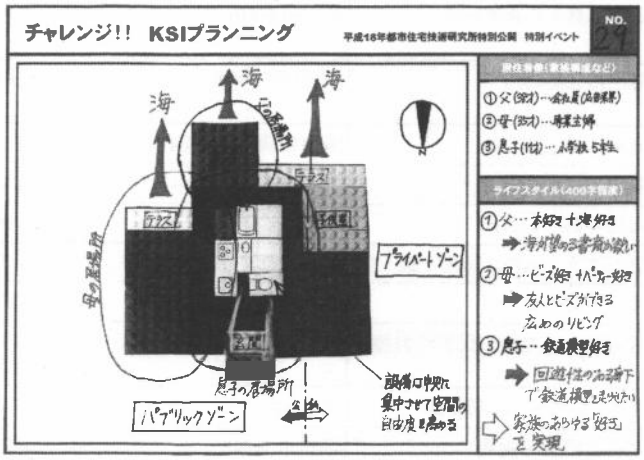
こちらは、2ヶ月ほどの期間で図面を提出していただきました。

もう一つは、楽しみながら新しい住宅のしくみについて学んで提案していただこうという企画で、「チャレンジ！KSIプランニング」というものです。これまで集合住宅では水まわりについて自由に配置するということはなかなか難しかったのですが、このKSI住宅は10年、20年と生活していく中で、家族構成やライフスタイルに合わせて、水まわりの位置も自由に変更していくことができるようにしたものです。

この考え方をもとに学生の皆さんに組み立てブロックを使って住宅（90㎡）をプランニングしていただき、設計主旨を一枚の提案用紙にまとめていただきました。

学生の皆さんは、実験棟でKSI住宅の概念と要素技術の説明を聞いた後、1時間という制限時間の中で苦戦しながらも案をまとめ上げ、37の作品が提案されました。

これら2つの企画は審査委員会で優秀作品等を選考し、9月末に表彰式を行い賞状と賞金の授与が行われました。



入選作品のひとつ

地域の教育力の向上に向けて

多摩六都科学館　神山伸一

◆地域の教育力

地域の結びつきが弱まるにつれ、地域の教育力は低下し、いつの間にか教育は学校が行うもののようになっていた。教育は学校のみがその責任を負うのではなく、学校、家庭、地域がそれぞれの立場でこどもたちに関わっていく必要がある。

このため地域の教育力を回復すべきであるという指摘が多くなされており、地域の教育施設である当館に大きな期待が寄せられている。

◆多摩六都科学館の果たす役割

かつての地域の教育機能をそのまま活用するということではなく、次世代育成のために、地域の教育力を新たに構築するという視点が必要となる。

地域の教育の担い手がそれぞれ単独で教育力を発揮してもらうことも必要であるが、様々な機関が協力して取り組むことも重要であり、これらのコーディネーターとしての機能が当館に求められている。

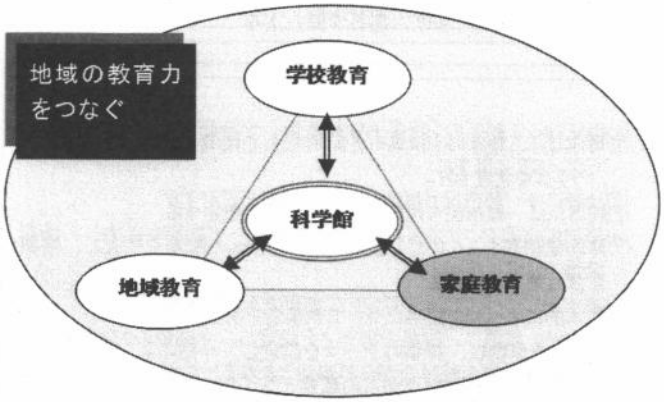
三者の連携を進め、各事業展開をつなぐ役割を担い、地域教育の中核となるコーディネーター、協働の中心としての機能が当館に求められており、期待されている。

◆地域との連携

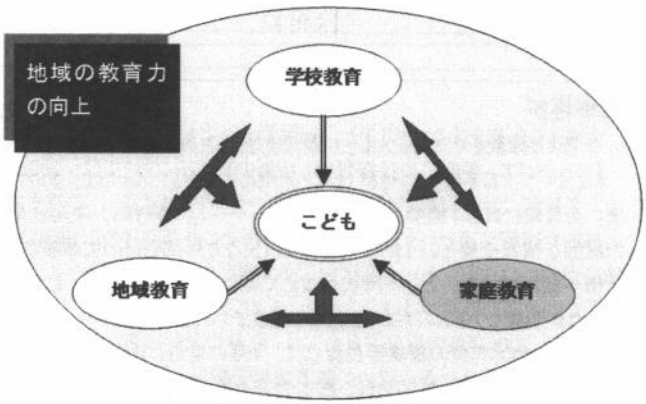
当館は、東京学芸大学と地域の教育力の向上のために共同して事業を行う協定を締結し、地域に対して様々な教育支援を展開できる土壌ができた。

学校教育の支援として、夏季教員セミナー、出前教室などを実施し、家庭教育支援としては一般市民向けの指導者講習会を行うなど地域との連携も模索し始めている。

今後は、企業、大学、ＮＰＯなどと広く連携し、学校教育や社会教育といった従来の枠組みでは対応できなかった課題を、地域のネットワークを活用することで解決を図るという新しいシステムの構築も視野に入れ、地域教育の中核として、地域を結ぶ架け橋として、その役割を果たし、地域の教育力の向上に取り組んで行きたいと考えている。



地域をつなぐ科学館の役割



地域の教育力イメージ図

東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」からダイヤモンドシティ行きバス「八幡神社」下車徒歩2分／多摩モノレール「上北台駅」からちょこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学工学部附属繊維博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
集合住宅歴史館	八王子市石川町2683-3	042-644-3571	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩18分／西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車

編集後記

今号より体裁をリニューアルし、紀要形式へと装いを一新しました。

『ミュージアム多摩』の性格付けと活用のあり方については、2005年度に会員館に対し「機関紙についてのアンケート」を行い、その結果、内部的な情報交換という目的と、一般市民など外部向けの広報紙的な性格が相半ばする、という現状が改めて明らかになりました。しかし、なかなか明確な方向づけはなされないままでした。

そこで、2006年度の編集委員会では、今号の発行にあたり、アンケートの結果を踏まえながら改めて基本方針を検討しました。その結果、次のような方針を立てました。

①構成はここ数年の「特集＋各館情報」を踏襲する（ただし分量のバランスを見直す）

②読者には一般市民も視野に入れた外部を想定する

③博物館情報をより必要としている機関等への配布を拡大し、情報発信の効率を高める

④基本的にすべての記事について執筆者を明記する

この方針を原則に、特集のテーマを設定し、今回のような体裁にしました。試行錯誤を続けながらの編集となりましたが、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩　No.28

発行日　2007年3月31日

発行　東京都三多摩公立博物館協議会
2006年度会長　府中市郷土の森博物館
府中市南町6-32　042-368-7921

編集委員　東大和市立郷土博物館：木村　敏
くにたち郷土文化館：森　克之
パルテノン多摩歴史ミュージアム：金子　淳
東京農工大学工学部附属繊維博物館：田中鶴代